MUSEUM ちば

千葉県博物館協会研究紀要

目　次

【特集】博物館が地域にできること

はじめに

●視察報告　先進的な活動を行う博物館について
千葉県博物館協会調査研究委員会…… 2

平成21年度　千葉県博物館協会研修会シンポジウム
「美術館・博物館が地域にできること」＜記録集＞
発表要旨・発言録

●基調講演　博物館と地域社会
国立歴史民俗博物館・山梨県立博物館　平川　南…… 6

●事例報告１　自然史博物館が地域に果たす役割
－植物誌調査を例に－
神奈川県立生命の星･地球博物館　勝山輝男…… 20

●事例報告２　地域を支える博物館をめざして
兵庫県立人と自然の博物館　田原直樹…… 27

●事例報告３　房総の山のフィールド・ミュージアム事業について
千葉県立中央博物館　尾崎煙雄…… 35

●事例報告４　連携から生まれる博物館事業
八千代市立郷土博物館　佐藤　誠…… 43

●パネルディスカッション　博物館が地域に果たす役割
コーディネーター　千葉県立中央博物館　佐久間豊
パネラー　勝山輝男・田原直樹
尾崎煙雄・佐藤　誠
コメンテーター　平川　南…… 51

千葉県博物館協会加盟館園一覧 …… 67

第40･41号
2010年３月
千葉県博物館協会

はじめに

当協会調査研究委員会では、この２年間に「博物館が地域にできること」というテーマを掲げ、平成20年度に地域における先進的な取組みを実践している博物館の視察調査、平成21年度に研修委員会との合同で千葉県博物館協会研修会シンポジウム「美術館・博物館が地域にできること」を開催しました。

『MUSEUMちば』では、第40・41号の合併号として、この研修会シンポジウムを記録集としてまとめ、地域振興における博物館活動の役割について特集しました。

本号では、国立歴史民俗博物館・山梨県立博物館長の平川南さんからは、地域社会における博物館の意義、＜発信と受信の展示＞という視点の転換に基づいた博物館活動の地域社会への貢献について御講演いただきました。

また、神奈川県立生命の星・地球博物館の勝山輝男さん、兵庫県立人と自然の博物館の田原直樹さん、千葉県立中央博物館の尾崎煙雄さん、八千代市立郷土博物館の佐藤誠さんからは、それぞれの地域に根ざした先進的で特色のある博物館活動の取組み内容や現状について、事例報告という形で紹介していただきました。

さらに、パネルディスカッション「博物館が地域に果たす役割」では、地域振興における博物館活動の課題について討論をまとめました。

博物館を取り巻く状況がますます厳しくなり、地域における文化施設として博物館の存在意義すらも問われている中で、今後の博物館活動の在り方を考えるうえで参考になれば幸いです。

平成22年３月

平成20･21年度調査研究委員会

理事　村田　一男（八千代市立郷土博物館）（H20）
　　矢戸　三男（八千代市立郷土博物館）（H21）
　　中里　雅慶（浦安市郷土博物館）

委員　佐藤　　誠（八千代市立郷土博物館）
　　林　奈都子（浦安市郷土博物館）
　　稲見　英輔（山武市歴史民俗資料館）
　　矢本　節朗（千葉県立中央博物館）

視察報告　地域における先進的な活動を行う博物館について

八千代市立郷土博物館　佐藤　誠（せい）
浦安市郷土博物館　林　奈都子
山武市歴史民俗資料館　稲見英輔
千葉県立中央博物館　矢本節朗

1　山梨県立博物館

平成20年12月３日（水）、調査研究委員会のメンバー２名で視察に伺った。

(1)「NPO　つなぐ」との密接な連携事業

博物館事業の内、「交流拠点形成事業」「わいわいミュージアム」「収蔵品ゆかりの地ツアー」などを「NPOつなぐ」に企画・運営を委託している。博物館の支援を受けながらNPOの持つ人材ネットワークを有効に活かして、毎回好評な事業を展開している。また「収蔵品ゆかりの地ツアー」のガイドブックも、「NPOつなぐ」が作成している。このようにNPOと博物館とで、お互いの役割分担が明確になされている。

(2)　自己評価システム「博物館の通信簿」

県民参画事業「わいわいミュージアム」の一つとして実施している「通信簿ツアー」があるが、この結果を受けて「館内改善ワークショップ」を開催している。ここで具体的な改善案を実際に試してみるという点が興味深い。ここに「NPOつなぐ」も利用者と共に参加し、館内環境の改善実現に協力して、案内看板の作成や、クイズスタンド、展示ガイドブックなども作成している。

(3)　企画展「甲州食べもの紀行」

安藤広重、荻生徂徠など、過去に甲府を訪れたことのある６人の旅人がキャラクターになり、各コーナーを案内するという手法は、展示に親しみやすさを生んでいる。それぞれの人物が漫画になり、フキダシも付いて各コーナーに立つ。（NPOつなぐが制作した人気の案内看板である）展示は大人も充分学べる専門的な内容ではあるが、このキャラクター看板の採用によって、子ども達にもより親しみやすいイメージとなっている。また「NPOつなぐ」が制作した「甲州食べもの紀行のなかの、12のへぇ～」と言う冊子も、子ども達が興味を持てるように、写真と簡単な文章で構成されていて、子ども達の理解を助けることに一役買っている。

さらに館内レストランでは、これらの企画に合わせて郷土色豊かな特別メニューが用意されていて人気があり、視察当日はすでに完売の状況であった。

以上のような様々なNPOとの連携は、お客さまの視点に立っておもしろいものをという発想が大いに活かされており、大変参考になった。（佐藤）

2　兵庫県立人と自然の博物館

平成21年２月26日（木）、調査研究委員会のメンバー４名で視察に伺った。

ちょうど、視察直前にあたる２月６日（金）に、千葉県立中央博物館開館20周年シンポジウム「自然系博物館のこれから！」が開催され、パネラーとして参加されていた兵庫県立人と自然の博物館　岩槻邦男館長の発表を聞くことができたのは、幸いであった。「教える」教育から「共に学ぶ」学習へ。学ぶ歓びを伝える生涯学習支援の場として博物館があり、博物館を核としてその学びの輪を拡げていくことができるよう、さまざまな事業が展開されているというお話であった。

地域の一般市民を巻き込みながら、具体的にどのような事業展開がなされているのか。また、近年どこの館でも抱える財政危機による運営の窮状を、職員の意識改革をも含めた基本方針の大転換によって克服していく経緯、博物館を応援してくださる地域市民の層を戦略的に獲得していき、館との絆を深め合いながら、真の「協働」を目指して、次なるステージへと進化を

遂げていっている現状などを学ばせていただきたいということで、視察を受け入れていただいたものである。

シンポジウムにお招きした田原直樹氏の講演録をお読みいただくと、「ひとはくの新展開」という改革に伴って、地域との連携を深めていく各種事業のあり方を詳しく知ることができる。

私が勤務する浦安市郷土博物館も、「地域連携」と「生涯学習」を重視した基本コンセプトで運営をしているのだが、開館10年目を迎える今、最も痛切に思うことは、社会状況の変化を見据えた将来のビジョンと具体的な戦略目標が欠けているという点である。開館時には、目指すべき姿がハッキリしており、職員のみならず一人ひとりのボランティアまでもが、同じ理想像を共有し、各自がそれぞれ自分なりの活動目標を抱いて、努力していたように思う。しかしながら、10年を経た今、私自身、漁師町時代を知る世代（ボランティア）の高齢化問題など、「時の経過」に伴う社会の変化・現実に認識が追いついていかず、オロオロと日々の業務に追われるばかりとなって、『新展開』像を描きだせないまま、次なるステップに踏み出すことができないでいるのだ。「開館時の志を忘れてはならない」という気持ちと、「今のままではいけない、変わらなければ」という思いとの葛藤に甘んじながら、現実に目を背けたままでいる自分に気づくのである。

一つの『新展開』計画が終わったら、さらに次なる『新展開（ネクスト・ミュージアム・プロジェクト）』をつくり、着実に実践していく「ひとはく」さんの真摯な姿勢。厳しい現実のなかにありながらも、フィードバックを丁寧に追いながら、さらに次なる課題にチャレンジしていく気迫。めまぐるしく変わっていく時代の変化に合わせた柔軟さを備えながらも、館としてのミッションを貫き通すための運営体制を構築していこうとする決意。

「ひくはく」さんのこれからに、同志として熱いエールを送りつつ、私たち自身も、しなやかに、したたかに、次々と展開・進化していく魅力ある博物館像を常に市民に示していけるよう今なすべきことに力を尽くしていきたいと思う。（林）

3　神奈川県立生命の森・地球博物館

平成21年３月11日（水）、調査研究委員会のメンバー１名で視察に伺った。

今回のテーマについて、先進的な取り組み実績のある館のひとつとして、神奈川県立生命の森・地球博物館を訪問しました。

同館では、中学校の理科の事業への協力支援にみられる博学連携、丹沢ブナ党シンポジュウム、鳥類学会での研究発表、各種団体・PKOとの連携や、ミュージアムリレーにみられる同系統や異系統の博物館・園との協力事業など、多彩に地域活動を展開し、その活動範囲は神奈川県内を越え千葉県においても、県立中央博物館と連携して休耕田での自然観察会を開催しています。

多彩な事業の全てについて、調査するのは難しいため、自分の立場で関心の高い事項について質問し回答をいただきました。以下にその概要を記します。

博学連携について、管理の部署に教育現場から来た職員を３名配置し、学校からの要望に対応しています。また、教員の博物館での研修について実施していますが、希望件数が多くなってきているようです。

地域の館・園どうしの連携について、本館は神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会に所属し、他の加盟館と共に、「ミュージアムリレー」という活動を行っています。この活動は、地域内の博物館・園がゆるやかな連携を取りながら、情報交換や情報発信をして行こうという趣旨で、加盟館が持ちまわりで毎月展示活動を行うもので、分りやすい解説や体験コーナーが人気を呼んでいます。平成９年から活動を始めて、その実績は10年以上です。

最後に同館を訪問した感想を記します。中学校の学習指導案に関与するレベルの博学連携や各種団体との協力・連携など多くの分野で千葉県内での活動を上回っていると感じました。

特にミュージアムリレーについて、人文系や美術館など異系統の館・園との交流形態は今後の千葉県の博物館・園の活動のモデルとなるものではないかと思いました。（稲見）

4　滋賀県立琵琶湖博物館

兵庫県立人と自然の博物館視察の翌日、平成21年2月27日(金)に調査研究委員4名で視察に伺った。

滋賀県立琵琶湖博物館（以下、琵琶湖博と略称）について事前の知識でいくつか注目される、驚かされる事柄があった。1つ目は、琵琶湖博が11年あまりの準備期間、学芸員採用からでも7年をかけて開館し、その間学芸員が主体となって、また地域の人々と一緒になって博物館活動を試行しながら活動理念をまとめあげ開館していることである。その理念は、「湖と人間」というテーマをもった博物館、フィールドへの誘いとなる博物館、交流の場としての博物館という3つの基本理念としてまとめられた。琵琶湖博は1996年開館の比較的新しい博物館で、博物館の生涯学習機能面や参加型博物館が社会から要請されだした時期に開館した博物館であった。学芸員は「準備室だけど博物館」の精神、「発見・創造は現場のフィールドから生まれる」という現場主義（人が暮らし、自然がある現場こそが博物館であるという考え）から、地域での研究・交流活動の入り口（導入）になるようなプログラムを企画、実践して、市民が地域に関心をもつようにすることを目指した。また、人々の幅広い利活用と交流の場としての博物館を目指し、人・物・情報が交流する場を目指そうと活動している。開館準備期間段階でのこうした理念や実践により琵琶湖博は、見学する場のみに止まらず、学芸員とともに市民が参加、作るという活動の場としての博物館という高い理念・機能の完成度をもって開館したことは想像に難くない。

2つ目は、入館者数の多さに驚いたことである。2008年度の入館者は約40万9千人を数える。近年、入館者は減りながらも、40万人台を維持している。「県民数も少なく、都市部でもないのに、何故こんなに人が入るのだろう。」という疑問が湧いた。実際に話を伺うと、これは私の全くの認識不足であった。琵琶湖博は、県外の大阪府・京都府から比較的近郊で安土城や近江八幡、対岸には比叡山延暦寺や雄琴温泉等の観光地が近く日帰り、1泊旅行の観光ルート上にあり、県外学校団体も遠足・校外学習に適した立地施設である。県外者の利用が高く、京阪地区のビジターを獲得する広報戦略も採られているという。しかし、リピーター率も非常に高いということなので、入館者数の多さは立地の良さばかりではないであろう。展示については、県立の総合博物館なので、「淡水の生き物たち」展示も小規模だろうと思っていたが、専門水族館に匹敵する充実した内容であり、水族展示だけでも再来館したいと思わせるに十分であった。他の展示室でも、「自然史研究室」・「博物館の地下を探る」展示室など博物館の研究・フィールド調査自体をそのまま展示して、先に述べた現場主義、活動の場としての博物館や地域の研究活動の導入になるような展示の仕掛けが工夫されている。博物館設計は、湖岸を囲むようにガラス張りで大きく開かれていて、琵琶湖の美しい景色や対岸の比叡山の山並みを望めるよう配置されてあり、家族で何度でも楽しめ魅力ある博物館との印象を持った。

琵琶湖博は、2005年に中長期基本計画「地域だれでも・どこでも博物館」を策定し、特に博物館と地域の人々との活動を強化する基本方針を打ち出している。この活動の中心をなすのが、「フィールドレポーター」・「はしかけ」制度である。両制度とも従来の受身的活動のボランティアの枠を超え、博物館の調査研究や事業・活動に自主的・積極的にかかわり様々な活動を行う人たちの組織である。フィールドレポーター制度は地域の人々に自然や日常の生活の情報を調査して、それをもとに発信・交流活動をする人たちである。はしかけ制度は、共に活動する楽しむグループ、学芸員と一緒に研究を行うグループ、展示を一緒に作ったり、体験学習のプログラム開発など博物館を作る活動をするグループがあり多彩な活動を行っているという。他の博物館と同様にメンバーの高齢化、グループ間の活動の温度差等の問題があるとのことだか、それでも2008年度末でフィールドレポーター157名、はしかけ374名もの多数の人が登録していて、博物館と地域の人々の参加・発見、体験・交流、対話・応援をまさに「はしかけ」して、活動・交流する場としての博物館機能を発展させる原動力となっている。こうした参加型博物館を推進するには、学芸員側の市民と作るという意識変換が必要であることを痛感した。(矢本)

千葉県博物館協会研修会シンポジウム

名　　称　千葉県博物館協会研修会シンポジウム

テ　ー　マ　「美術館・博物館が地域にできること」

主　　催　千葉県博物館協会

日　　時　平成21年10月９日(金)　午前９時30分～午後４時30分

会　　場　千葉県立中央博物館　講堂

内容・日程

開会挨拶　千葉県博物館協会副会長　川根正教（流山市博物館長）

基調講演　「博物館と地域社会」
平川　南（国立歴史民俗博物館長・山梨県立博物館長）

事例報告１　「自然史博物館が地域に果たす役割－植物誌調査を例に－」
勝山輝男（神奈川県立生命の星・地球博物館企画普及課長）

事例報告２　「地域を支える博物館をめざして」
田原直樹（兵庫県立人と自然の博物館主任研究員）

事例報告３　「房総の山のフィールド・ミュージアム事業について」
尾崎煙雄（千葉県立中央博物館上席研究員）

事例報告４　「連携から生まれる博物館事業」
佐藤　誠（八千代市立郷土博物館主任学芸員）

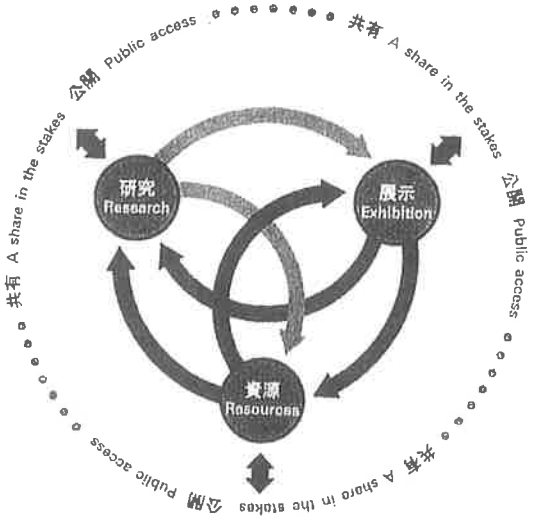
パネルディスカッション
「博物館が地域にはたす役割」
コーディネーター：佐久間　豊（千葉県博物館協会長）
パネラー：田原直樹・勝山輝男・尾崎煙雄・佐藤誠
コメンテーター：平川南

発表要旨

博物館と地域社会

国立歴史民俗博物館・山梨県立歴史博物館長　平　川　　南

博物館型研究統合



博物館は、学術資料・情報の収集、整理、保存、調査研究そして提供という一連の機能を有することを最大の特色としている。

博物館のもつそれらの機能を、〈研究〉〈資源〉〈展示〉の三要素に整理してみると、有機的な連携とは、三者がそれぞれに相互関連をもち、全体で有機的な連関をもつ円環をなすことである。これを「博物館型研究統合」と名づけるが、これは三つの要素をもつ博物館だからこそ、採用しうる独自のスタイルである。博物館型研究統合という理念のもとに、全ての博物館の研究活動を集約すれば、他の研究機関が付随することのできない独創性を獲得できる。

この円環は三方に〈共有・公開〉との双方向ベクトルをもつ開放形で、決して研究機関の内部だけに閉じられたものではない。社会をも含みうる研究スタイルであって、新しい研究法の提唱にもなる。特に、社会との強力な結節点をもつことができる博物館にとっては、有利なスタイルといえる。

さらに、この博物館型研究統合は、新しい展示概念の提唱でもある。すなわち、〈展示〉は研究成果の公開という〈研究〉の終着点ではなく、そこから再び〈研究〉や〈資源〉へと出発する起点にもなっている。その再出発の過程には〈共有・公開〉が介在する。換言すれば、〈発信の展示〉から〈発信と受信の展示〉への転換が求められている。研究を展示に活かして発信するだけではなく、展示を通して学界や広く社会から受信して研究に活かすことこそが、博物館をもつことの意義である。

1．博物館の役割

『日本経済新聞』2000年7月12日夕刊のコラム「鐘」欄で、博物館について次のような提言がなされている。

「『博物館』というものは、その国が最も重きをおいている価値観を反映している」（桝谷邦彦著「ドイツ魂」）

主要国首脳会議（沖縄サミット）の蔵相会合が開かれた福岡市博物館は、古代に国際交流の窓口だった福岡の歴史的文物を展示している。各国の閣僚を迎えるのにふさわしい会場だ。しかし、“国の顔”ともいえる博物館は、全国どこにもない。それは、日本が国際社会から「顔が見えない」と言われてきたことと通じるような気がする。

技術大国の米国が「航空宇宙博物館」を、英国が壮大な歴史館「大英博物館」を、フランスが美の殿堂「ルーブル美術館」を作った例になぞらえれば、日本の博物館は平和の創出や自然と人間との調和をコンセプトにしたものになるだろう。

首脳会合では、紛争予防や地域環境保全といった21世紀に向けた重要なテーマも議論する。日本はどう考えるのか、何ができるのか。美辞麗句だけでは、展示品のない博物館を見せるようなものだ。

この指摘の中で、日本の博物館が世界に向けて発信できる意義のあるコンセプトは「自然と人間との調和」と「平和の創出」であるという。

自然と人間との調和

際限のない環境破壊は、自然のみならず人間性を無視し、更に地域の自立的発展を阻止するものへと拡大している。これまでの歴史学は人間とその社会的関係を主に対象として扱い、自然との関係を不問に付してきたと思われる。

歴博では、1995年度から基幹研究として「日本の歴史における災害と開発」をスタートさせた。資源としての自然、また大きな災害をもたらす脅威としての自然に対して、日本列島に住む人々がこれまでの歴史の中で、どのように対処してきたかを明らかにすることがその研究目的である。すなわち、これまでの文献史料のみによる政治史的・社会経済史的側面からだけでは見えてこなかった日本人の自然認識の歴史を明らかにしようとするものである。

平和の創出

緊迫した世界情勢、特に東アジア諸国との危機的現状を改善するための歴史学の役割としては、民族主義を超えた歴史、一国史のパラダイムを壊すことである、と多くの国の歴史学者が指摘している。特に近年の東アジア諸国間の国境問題などに見られる国際紛争は、近代国家の枠組みが大きく影響している。

近代以前において国境は点であり、ゾーンだった。漁師たちが漂着する場であったり、文化の交流の場であったりしたものが、国民国家が線を引いたことで領土の認識ができて、紛争の場になった（2006年５月10日朝日新聞「連続インタビュー　歴史認識」の韓国の歴史学者林志弦氏の見解）。

このような国境紛争をはじめ、異なる歴史認識に起因する軋轢が国内外で惹起しているなかにあって、博物館は現代的視点と世界史的視野に立った多様な歴史像と柔軟な歴史認識を、全ての人々に提供せねばならない。

２．地域社会へのまなざし

Ａ．博物館展示の実践例―山梨県立博物館・基本テーマ「山梨の自然と人」―

企画展（2008年10月11日 ～ 12月8日）

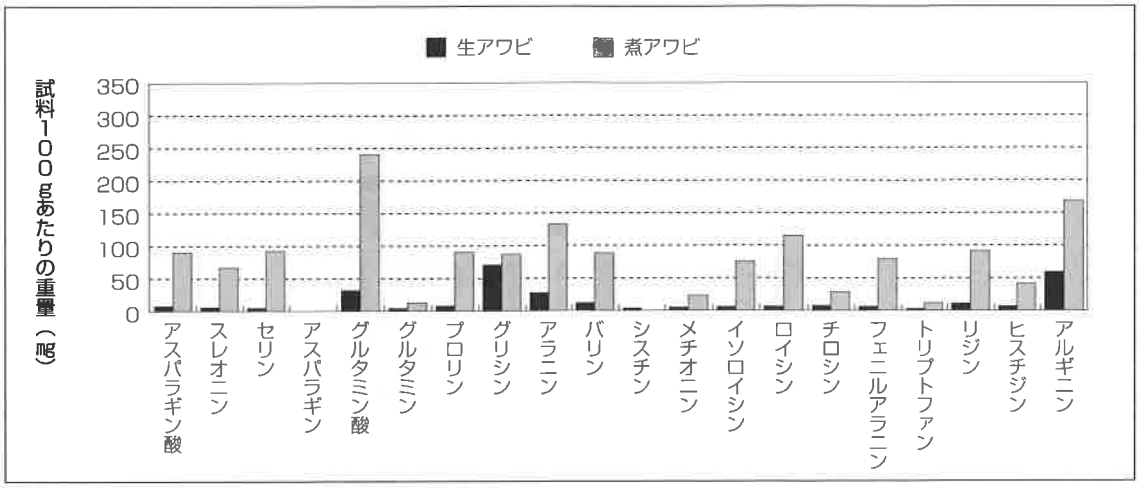
「甲州食べ物紀行―山国の豊かな食文化」　〔企画展展示図録（2008年）より抜粋〕

甲州名物鮑の煮貝

煮貝（にがい）（貝）はどのようにして生み出されたのか。

「江戸時代の末期、静岡県沼津港の魚問屋小松屋の主人が伊豆七島産のなまアワビを上質の醤油で加工し、たる詰めにして人の肩や馬の背につけ、海に遠い山国甲州に送り込んだのが初めといわれ、山坂道をコトコト揺られて甲府へ着くころが最上の食べごろとなり、これを甲府勤番の武士や文人墨客が“江戸にない味覚”と賛美、甲州土産として江戸へもたらしたことから甲州名物となった」（『山梨百科辞典』）というあたりがよく語られるところである。

アワビ（肝）アミノ酸の平均値



エピローグ　―食の豊かさとは―

我々は飽食の時代を生きている。この時代は食の激変の時代でもある。祖父母と孫が子供の頃に食べていたものがまったく違う。このようなことは歴史上なかったことである。

しかし、一見豊かに見える時代も食の偽装問題、下がる一方の食料自給率など、その土台は非常に脆いことが露呈しつつある。

ほんの数十年前まで、多くの日本人は身近でとれた食材を口にしていた。それを豊かだと認識していた人はわずかである。多くの日本人にとって、白い米を腹いっぱい食べることが切なる願いであった。

いまや米は余り、飢えを心配することも希である。しかし、産地のわからない食材や材料のわからない加工食品。それらが日本中どこでも同じように食べきれないほどあふれていることが果たして豊かといえるのだろうか。

山梨には地域の風土の中で、先人たちが長い年月をかけて作りあげてきた食文化がある。国宝や重要文化財のように形として残らなくても、それらも立派な地域の遺産である。

地域の食を見直すことは、地域を元気にすることでもある。本展で示したように、ありふれた日常食も他地域の人から見れば珍しい食べ物である。ここに地域再生のきっかけが眠っているのではないか。

本展では多様な山梨の食の一端を紹介できたに過ぎない。しかし、この展示が山梨の食文化を見直すきっかけとなれば幸いである。

凍(し)み芋
カラカラに乾燥しており、水で戻してから茹でるとシコシコした食感になる。　〔富士山麓の山梨県南都留郡鳴沢村〕
（山梨学院短期大学　依田萬代氏撮影）

チューニョ作りのために野天に広げられたジャガイモ
〔アンデス高地〕（山本紀夫氏撮影）

美味(お い)しんぼ 80

57

B．博物館展示の実践例 ― 国立歴史民俗博物館・基本テーマ
「未来を切り拓く歴史的展望の獲得と歴史認識を異にする人々の相互理解を実現する」―

特別企画展（2006年7月4日 ～ 9月3日）
「佐倉連隊にみる戦争の時代」

国立歴史民俗博物館が建っている場所は、近世の佐倉城の遺跡であり、戦前佐倉兵営が置かれていた所でもある。1873年（明治６）、全国にさきがけ関東地方で施行された第１回徴兵で集められた若者たちは、翌年よりこの兵営で訓練を開始した。彼らを編成してできた佐倉歩兵第２連隊は、近代日本最初の歩兵連隊となり、1877年（明治10）の西南戦争への出兵に始まり、日清・日露の両戦争に出征し、1909年（明治42）３月、水戸兵営に移駐した。代わって佐倉兵営に入った歩兵第57連隊は、それまでの千葉・茨城両県からの徴集兵ではなく、千葉県下の若者のみが入隊する郷土部隊として、千葉県民の生活と歴史にとって切っても切り離すことのできない存在となった。その後、この佐倉兵営は日中戦争には中国の華中・華北の地に毎年、現役兵を送り続け、そして歩兵第57連隊は、1944年（昭和19）のグアム・レイテ戦での悲劇を迎えるのである。

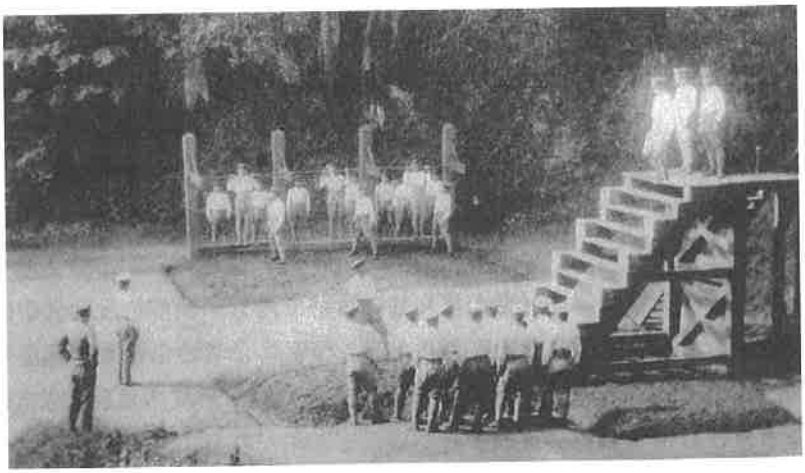
この歩兵第２連隊、第57連隊の歴史を実証的に見ていけば、１部隊、１兵営にとどまらない、戦争の時代の歴史が予想される以上によく理解できるに違いない。今回の展示は、徴集された千葉県の若者の視点に立って、彼らがどのように徴兵検査を受け、どう兵営で訓練され、どんな軍隊生活を送り、そしていかに戦ったのかを、３ヵ年の共同研究を踏まえて展示したものである。

成果と問題点　〔国立歴史民俗博物館年報3（2006年度）より〕

本館にとって本展示は、近現代の戦争を正面から取り扱った最初の試みであるが、館が所在する佐倉市・千葉県という地域を題材にしたことで、地元からは特に大きな反響を得ることができた。軍隊経験者を含む観覧者が展示室で談話する姿が多く見られ、大きな歴史の流れの中に自分史を位置づけるような受け取り方がなされたものと推測された。内容については、観覧者のアンケート結果を見る限り、様々な意見・立場からする厳しい批判も一部あったが、おおむね好評だったといえる。準備の過程、さらには会期中にも新たな資料の発見、寄贈の申し出、情報の提供などがあり、関連する文書・書籍・写真・物品などの諸資料を多数集めることができた。それらの資料・情報は、総合展示第６室の新設計画にも今後活用されることになるはずである。

むすび

「博物館」はその国、その地域社会がもっとも重きをおいている価値観を反映させなければならない重要な文化施設である。その博物館の調査研究活動に基づいた“豊かで多様な自然と歴史に根ざした街や村づくり”こそが、国や地域の未来を切り拓く大きな原動力となるに違いない。



高所飛び下り訓練などを行う兵士（佐倉市教育委員会所蔵、1930年発行『佐倉歩兵第五十七連隊第十一中隊記念写真帖』所収）

（国立歴史博物館編集、2006年発行『佐倉連隊にみる戦争の時代』展示解説図録所収）

発言録

基調講演　博物館と地域社会

国立歴史民俗博物館・山梨県立歴史博物館長　平　川　　南

国立歴史民俗博物館の平川です。よろしくお願いします。いつもですと、自分で研究している古代史の内容について講演することが多いのですが、今、私は博物館に深く関わっていますし、博物館そのものが現代社会においてきわめて重要でありながらその社会的な認識が充分ではないということから、今回のお話をしていきたいと思います。

博物館に対して全国的な逆風が吹いているようで、色々な批判を受けたり、中には経営を縮小せざるを得ないようなそういう状態に立ち至っている博物館もあります。そのような中で、博物館関係者である皆さんも、日夜色々な悩みを抱えていると思います。しかし国際的にいえば、今まさに世界での博物館建設が進み、従来の美術館を中心にした建設から、歴史系の博物館の建設が増え、ヨーロッパやカナダなど各地で建設されています。来月もオランダの文部科学省にあたる大臣が「オランダに国立の歴史博物館を設置したい」ということで歴博に視察を兼ねて来られます。それは現代社会の様々な問題、ヨーロッパであればそれぞれの国の自立、あるいはお互いの移民政策のような重要な共通したテーマを、どのように自国の国民に、そして国外の人たちに発信していくかということが非常に重要な点になってきているからです。そのためには研究論文あるいは教科書のようなものではとても充分に説明しきれない。やはり博物館の持っている絶対的な膨大な資料に基づいて実証的に積み上げていって、難しい問題を充分に調査研究して、それをわかりやすく国民に、そして国外に情報発信する。そのためにはやはり博物館という施設を使う、博物館という機能を充分に活かすということで、そうした難しい問題に答えることができる。そういうことが国際的な共通した理解になっています。これは翻って考えて見ますと、今我々が社会に対して批判精神を養う場合にも共通して言えることではないかと思います。むしろ経済が冷え込んできた今だからこそ、それぞれの地域の資源というものを掘り起こしていくことが、経済を活性化させる、あるいは町や村を活性化させることになる一番の方法ではないかと思います。そういうふうに目を向けたときにその核になるのが、博物館であり美術館なのですと言えるんではないかと思います。最初に結論めいたことを話しましたが、そういったことから改めて、我々は今こそ地域社会において博物館・美術館の持つ役割というものを、充分に一般の市民の方々にも理解してもらえるように情報発信していく、そういう段階にきていると考えております。

今日はその点を私の乏しい経験をもとに具体的な例が、少しでも皆さんに参考になればということで講演をお引き受けいたしました。

私は今、国立の歴史民俗博物館に勤めておりますけれども、この博物館はご承知のように1981年に（機関）設置されて、その２年後に開館し、現在ちょうど25年を過ぎたところです。つまり、四半世紀を経過したということで、改めてこの博物館の設置目的あるいは存在意義ということを各方面から問われております。これは私が館長に就任したころ国立大学の法人化ということもありまして、過去にいろいろな場で「いったい歴博の国立の博物館の必要性は何なのか」ということを、ストレートにしょっちゅういろいろな機会に問われる、そういう場面に出くわした。これは私が現在兼任しております山梨の県立博物館も全く同じ（状況です）。むしろ山梨県博の方が、より厳しい条件時に立ち上がったということは、皆さんも薄々ご存知でしょうけども、設置に際して県が２分して、本当は３分したんですね、「建設促進」・「建設反対」・「建設凍結」という、当時の知事選挙の３人の候補が、それぞれの立場から争った。知事選の争点がそれしかなかったと

いう、博物館をめぐる設置だけが争点だったという。そういう中からやっと推進派の知事が誕生して、（博物館設置が）立ち上がったわけですから、最初から針の筵のようなところで出発した。その時にやはり一番求められたのが、基本コンセプトです。「何のために博物館が存在するか」そういうストレートな質問が浴びせられた。ですから歴博も漫然と25年が過ぎてしまったんですが、改めて法人化された今、特に文化庁が設置している国立の博物館との違い、それから大学が次々に設置している総合博物館との違いなどが問われています。さらに歴史を研究するといえば、「大学にある史学科とどこが違うのか」というような問いかけがなされております。ですから、それにどういうふうに答えるかということで、当時2006年から１年間、中堅の助教授を５人指名しまして、１年をかけて議論して、そこから生み出されたのが『歴博の目指すもの』という小冊子です。その中で謳っているのが、今日のレジュメの最初に書いた部分になるかと思います。つまり「博物館というのはいったい何をするところであるのか？」、あるいは「博物館のもっている機能というのは何なのか？」を、やはり明快に答える必要がある。それは博物館というのは圧倒的な学術資料情報を収集をするというところにまず第一の機能がある。それを整理して保存するという機能も大変重要です。今、次々に歴史資料、民俗資料、考古資料が失われていく。そういう中で博物館がそういう資料を必死になって収集していく機能がまず最初になければいけない。そして、それを整理して保存し、さらに調査研究という機能がなければ、その資料は意味がない。そして、それを単に調査研究しただけでは、それは一般社会にとって何にも成果というものが提供されないことになります。提供機能が必要であり、活字で出版するというこれまでの大学なんかにある成果の公開の仕方に対して、博物館には展示という一つの大きな機能をもっている。これを軸に活かす。あるいは、館を通じて広くインターネットで情報を公開していくという提供の仕方もあります。またデータベースという形でさまざまに提供する。この一連の機能こそ、博物館の持っている最大の特色であると言えるでしょう。これは大学や既存の研究機関にもない機能です。そしてその３つの機能というものは、今日の事例報告に、事前に私も読ませてもらったのですけれど、各館でやられている活動を見ればその答えは明らかなのです。資源を蓄積し、その資源を調査研究し、さらにそれを展示という形で活かす。展示したら、またそこから大きな資料が集積される。そしてまた新たな研究課題が発見されていく。この双方向にベクトルが作用し合う、これこそが博物館の持っている大きな特色です。これを充分に活かすことが必要なのです。

もう一つ博物館の持っている最大の武器といえるのは、それがすべて共有・公開される機能を持っているということです。つまり、資料にしても、研究にしても、そして展示にしても、それが一般社会と学会や市民の皆さんとも広く共有・公開される、開かれているということです。そしていつも地域社会、地域の博物館であれば地域社会と密接にキャッチボールされている、開かれている。その機能が今までの学術研究を行ってきた機関と博物館との大きな違いである。この利点を最大限活かしていく必要があると思います。そのことは、一つにはいつも研究する課題というものが現代の視点にあり、世界史的視点にあり、さらに地域の課題というものの解明にいつも意識が向くという、これが公開・共有されているからこそなのです。戦後の大学を中心にした学術研究というものが、特に私などは人文学のフィールドにいますけれど、そのことが本当に社会を動かしてきたかというと、必ずしもそうとは言えない。それはやはり問題設定、研究課題というものが、学会あるいは大学の中に閉じこもっていたからです。現代社会が何を求めているのか、どういう事を一番に解明しなければならないのかという問題意識という点では、私は「博物館からこれから新しい研究が生まれていく」と自信を持って申し上げることができるかと思います。そしてこれまでは研究した成果をいわば展示という形で公開するというふうに言ってきたのですけれど、この展示という機能は研究の成果の公開ではあるけれども、それを公開することによって、それを見ていただいた多くの方々から寄せられる様々な情報というものは、むしろ新たな研究の課題の発見にもつながる。そういう面では今までの一方的な発信の展示から、発信と受信、受信する機能を博物館は意識して持つことによって、新たな研究が展開できると。それこそが、学会や広く社会から受信して研究を打ち出すということが、博物館の最大の意義でもあるし、博物館が持っている大きな機能でもあるということを充分に意識して、これから取り組むことが必要でないかと思います。

私は博物館の役割と言った時にいつも引用するのが、この2000年の『日本経済新聞』にのったコラム記事、これは私にとってはまさに我が意を得たりで、この言葉が自分自身が今博物館に深くかかわっている身の、いわば最大の宝のような言葉です。これはドイツ文学者の桝谷邦彦さんが書かれた『ドイツ魂』という本の一節に書かれている「博物館が、その国において最も重きをおいている価値観を反映している」という言葉です。このことは本日の最後に申し上げますが、この国のという部分を地域と置き換えた時に、「博物館は、その地域において最も重きをおいている価値観を反映している」文化施設でなければならないということになりますし、実に重い、我々にとっては勇気百倍の言葉ではないか。それが実際には、まだ充分に行政の中でも意識されていないし、一般社会の中でも博物館という位置付けがこのような高い理念というものの理解を得ていないところに最大の問題があるわけです。この日経コラムでは、そのことを例えば、技術大国のアメリカであれば国立航空宇宙博物館であるとか、あるいはイギリスであれば大英博物館であるとか、フランスであれば正に美の殿堂であるルーブル美術館であるということを挙げて、日本の博物館には国際社会の中で、日本であればこういう博物館というものがまだないと言っています。もしそれを求めるとすれば、日本がそのことを世界に誇る博物館は、「平和の創出」と「自然の調和」であろうというふうにこのコラムでは言っています。私も日本の博物館が世界に発信できる最大の意味のあるコンセプトではないかと考えています。それはやはり、自然と人間との調和、自然と人間がどのように向き合ってきたのかという歴史を解明することによって、現代社会の中で私たちが「自然や環境にどのように向き合ったらいいのか？」、そういう思想を新たにすることができるのではないかと思います。これは実は山梨の県立の博物館を作るときに、まず基本のコンセプトにこだわって取り入れ、これをはっきりと表明しないと今後ブレが生じるということから、亡くなりました網野義彦さんと議論して、山梨の県立の博物館の基本コンセプトを「山梨の自然と人」と表現したのも正にこういう思想からです。首都圏に接した山梨という地域が、現代あるいはこれからどう活きていくかというと、最大限の資源というものは自然しかない。ですから自然というものの資源をどのようにこれから大切にしていくかを、県のいわば生きる道として考えるといった時に、これまでの原始、古代から近世、現代まで山梨の人たちが自然とどのように向き合ってきたのか、その歴史を明らかにすることによって、改めて自然の豊かさとそれから自然の持っている驚異、あの盆地はしょっちゅう洪水に悩まされてきたんですから、改めてそういう自然の驚異を考える必要があるでしょう。昨日の台風ではないですが、人々が避けられないそういう自然のエネルギー・驚異というものを改めて考える必要がある。そこから新しい自然、自然をこれから最も大切にすべきという思想を特に若い人たちに教育していく。それが博物館が行う最大の役割として掲げなくてはならないのです。

それから平和の創出というのは言わずもがなですが、やはりこの緊迫した世界情勢の中でこれからどのように有意義な世界の平和を創出していくかという時に、やはり日本がリーダシップをとる必要があるということで、この平和の創出ということは有意義なことです。これを博物館が発信していくことが求められています。これは『歴博の目指すもの』の理念の中にはっきりと謳っています。現代的な視点と世界史的な視野に立った多様な歴史と柔軟な歴史というものを全ての人に提供する、我々はそういう役割を持たねばならない。これが歴博の新しいコンセプトの一つです。

それでは具体的にもう少し博物館が地域社会というものにどのように対応するのか述べてみたいと思います。地域社会への眼差しということで、これから２例、私が今関係しております山梨の県立博物館の展示と、それから歴博の展示を紹介して、地域とどのように提携していくのか、あるいは地域社会というものの振興に博物館がどのような役割を果たすべきなのか考えてみたいと思います。

まず2008年、昨年の秋に、満を持して私が最初から一番やりたかった非常に身近なテーマ「山国の豊かな食文化」です。

山梨の県博は開館の時に開館記念展示を何にするかということで、館員は一致してやはり一番地域に特色のあることをやりたい。そこで選んだのが、あのような山国で現在まで色濃く残されている民俗行事の道祖神信仰、道祖神祭りでした。県下、特に山間部に残されている道祖神を隈なく調査して、それを一堂に会してしてみたい。これに対して、県内の有力な文化人や研究者からはかなり反発がありました。「開館記念の展示になぜ日頃見慣れている道祖神なんかを取り上げ

るのだ」というものでした。「やはり開館記念には、国宝、重文の普段見られない仏像なり何なりを出すのが当たり前ではないか」と言うことです。しかし私たちの基本コンセプトは「山梨の人と自然のかかわり」な訳ですから、道祖神の存在というものは、まさにあの厳しい自然環境との関わりのなかで生まれたもので、そしてそれが現在まで営々と生き続けているのは、やはり地域の大きな特色そのものなのです。つまり閉ざされた空間の中に外から悪いものがやってくる、一本道を伝ってくる。福をもたらすと共にいろいろ災いをもたらす。それを何とかムラの入口で食い止める、悪霊をムラに入らせない、その信仰こそが道祖神の基本になる。これは開館にふさわしいということで、展示を強行しました。そして道祖神の飾りつけは、すべてそれぞれの地元の方が博物館に来て飾り付けをしていただきました。とても華やかな、他の地域では見られないような華やかな道祖神祭りが、1月の開館時に執り行われたわけです。驚いたのはそれぞれの地域の人たちは他の地域の道祖神を見たことがない。同じ時期にやりますから隣のものを見るということはない。それが一堂に会しましたから、改めて自分たちのものとほかの地域のものを比較することになる。それで、その次の年に県内の道祖神祭りは一段とヒートアップするわけです。それをあちこちから聞いたときに、これは「やったな」というふうに思いました。

これは今日、資料で出してますが、今「民俗芸能ライブ」というものをやっており、9回目となるんです。県博の庭あるいは雨の時は館内でやるんですが、各地の民俗芸能をその企画展示に合わせてお招きして実演をしていただくという、そういう催しをずっと続けております。

市ノ瀬高橋というところでやっているものは第2回目とその後もう1回、第7回目にやっているのですが、1度過疎高齢化で祭りが中止されていたのに、県博でやるということで有志の方が何名か集まってやっていただいて、その集落の人、特に若い方が見て、これは大変意味のある祭りであり、そして大勢の方々に見てもらえたということで、若い方々を中心に再開されて、一段とボリュームアップされたものを第7回のときに率先してやっていただいたのです、企画展もないのにやっていただけたのです。

第6回の笹子の追分人形芝居についても、今ちょうど「甲斐道をゆく」という、道の歴史を古代から近現代まで通した企画展をやっているのですが、笹子峠の追分、つまり甲州街道を旅する人に向けて上演されたということで、この保存会のほうから「現在の企画展にぴったりなので、是非県博で実演をしたい」という申し出がありまして、現在の企画展の会期中に行うことが決まりました。このように、やはり地域の持っている隠れたものを掘り起こしていく、それこそが地域の博物館の大きな役割ではないかと考えます。

第2回（2005年11月）　一之瀬高橋の春駒（甲州市）

第7回（2008年11月）　一之瀬高橋の春駒（甲州市）

第6回（2008年3月）　笹子追分人形芝居（大月市）

そして、2008年に開催した「甲州食べもの紀行－山国の豊かな食文化－」というのは、（山梨は）私も育ったところですけれども、千葉に居れば新鮮なマグロなどがふんだんに食べられるわけですが、山間部ではなかなかそうはいかない。このことが知らず知らずに県民に、例えば静岡の人たちに対してある種の劣等感みたいな、食に対して生魚が食べられないとか、そういう引いた考え方が結構強かったのを覚えています。

ところが、実際に企画展で「甲州食べもの紀行－山国の豊かな食文化－」をやった時に、改めて内陸には内陸の様々な先祖の人たちがいろいろ考えて工夫した食べ物の文化があるということを再発見することができたわけです。例えば皆さんご承知でしょうか、海のない山梨で一番代表的な名物に鮑があるんです。海で獲れる鮑が山梨の最大の名産になっている。とても不思議な感じがしますが、これは「煮貝（ニガイ）」という名前で商品化され、現在でも最高品のお土産になっています。これは江戸時代に静岡で獲れた鮑を、生のままでは食べられませんから、上質の醤油で一回煮て、それを樽詰めにして馬の背に揺られて峠を越えて甲府盆地にやってくる頃に、半ば少し発酵するんですね。すると旨味成分が出てきて、それを食べた甲府勤番の人たちが江戸に持ち帰ったりして、評判になり甲州名物となったのです。また北寄貝も鮨屋で食べても生ではあまり旨味というものは感じないんですけれども、これを甲州では干して、ふつう「姥貝（ウバガイ）」というんですが、食すわけです。私の小さい頃はとても高級なもので、今でもひとつ500円位はするのかな。乾燥した北寄貝ですから箱詰めにすると、４個か５個で２、３千円位するようなとても高級な食材です。これは大変味が出て、30分でも１時間でもガムのように噛んでも、いつまでも味がしますので、よく子どもの離乳食としても食べさせたりしました。「うま味」というのは「味の素」の特許で、これは英語でもUMAMIとそのまま使われます。私は味の素の食文化センターの評議委員ですので味の素にお願いして、「うまいうまいといっても、これは口で言ってもわかりませんので科学的データを出したい」と、企画展に間に合うように味の素のライフサイエンス研究所に今回分析をお願いしたのです。生の鮑と煮貝にしたもの、それから生の北寄貝と乾燥させた北寄貝、それが資料にありますグラフです。この最初のところと５番目のところです。いわゆるうま味成分は特にグルタミン酸、それからアスパラギン酸ですね、これがうま味成分の素になります。グラフの左側が生、右側のグラフが加工したものとなります。つまり乾燥させたり、発酵させることによって食品の持つうま味が凝縮されていくという、グルタミン酸とかアスパラギン酸が非常に高く出てうま味が出ることが証明されたわけです。つまり生で食べる食文化もあるけれども、それを乾燥させるあるいは加工することによって、より美味しさを味わうことができるんだということを証明したわけです。

もう一つは、これが脚光を浴びたのは『美味しんぼ』という漫画の一部でですが、富士山麓の鳴沢村という所、かなり標高の高い寒い所、そこではジャガイモを生産すると、冬の間庭に広げておく、あるいは畑に広げておく、そして夜間に凍ります。そしてまた日が差してくると昼は解凍する、というようなことを繰り返しているとブヨブヨになる。それにムシロをかけて足で踏んで、その水分を全部飛ばしてしまい、そしてペチャンコになったジャガイモをさらに天日に干して乾燥させ、水分がまったくない状態に完全にして、そうしてジャガイモの煎餅のようなものを作ります。そうすると１年中、食べるときは30分ぐらい湯に戻して、ちょっと調理すれば食べられる訳です。これを「凍(し)み芋(いも)」ということで名産になっています。『美味んぼ』では、モチモチとした食感とその甘さを「上品な甘さと、その甘さもくどくないのよ」と褒め称えていました。私も実際にいただいて食べたのですが、そんなにも積極的に食べたいと思わない。やはり調理しないと駄目なんですね。ところがやはり驚いたのは、この「凍み芋」の作り方は、遠く南米のアンデスに伝わる「チューニョ」というジャガイモの乾燥した食べ物と全く同じ作り方で味も同じなのです。中央アンデスはジャガイモの原産地で、たくさんのジャガイモが取れるのですが、高地特有の非常に小さなジャガイモです。したがって芽の部分にたくさんの毒素が含まれていて、それを抜くためにアンデスでは、やはり寒いときにこのジャガイモを一面に干して、そして凍らせブヨブヨにして、天日に干してもどす。それに今度は上からムシロを敷いて踏んづけて潰す。こうして作り出して「チューニョ」という食品になるわけです。これは保存食であると共に毒抜きになるということです。鳴沢の人たちがどこでこの作り方を学んだのかそれはわかりません。同じような所で、同じような製法でそういうものを考え作り上げ、そういうことでは山梨の地域の風土のなかで作り上げた貴重な食文化、これこそが地域の立派な遺産であろうとこの展示を通じて強調することができたのではないかと思います。

昨年の企画展は日経・読売・朝日と全部、全国版の文化欄で取り上げて頂き、非常に高い評価をいただきました。これまで企画展は１回限りで、どんどん新しいものを工夫してやるわけですが、これではとても博物館は持ちません。と同時にたった１、２ヶ月ぐらい

の開期の企画展にタイミングよくその展示を見られる方は、かなり限られた数字になるわけです。ですから1つのテーマをやはり少しづつ角度を変えながら連続して、何年かおきに企画展を繰り返しやることが貴重な資源を再利用できると同時に、テーマを人々に徹底していく、そういう意味でも意義あることである。繰り返して同じテーマをやることはとても大切なことであると、特にこの食文化の企画展をやるときに考えました。つまり思ったほど来館者は多くはなかったんですね。満を持してやった割には、そして新聞等で非常に評価が高かった割には県民の関心が低かった。やはり最初に申し上げた身近なものに対しての無関心さ、やはり目新しいもの、未知なものに人々の目が配られがちというのでしょうか。ここはやはり考えていく余地があると考えています。そのためにも繰り返していくテーマというものは、注目させるための一つの方法であるとも考えています。

それと歴博の中では、国立の博物館として地域だけというわけにはいかない。その性質上、国内外に対して幅広い期待に応えていく宿命もあります。これまでやった中で最も地域の方と一緒に展示を作り上げたのはこれしかないのですが、「佐倉連隊から見る戦争の時代」があります。これは博物館が持つ「未来を切り開く歴史的展望の獲得」と「歴史認識を異にする人々の相互理解を実現すること」ということで行いました。このテーマは来年の3月に開館27年を迎える歴博で、ちょっと恥ずかしいことですが、やっと1930年代以降の現代展示をオープンさせることが決まった、できるようになった訳です。それまで27年掛かってしまったわけで、今次の大戦、戦争という非常に難しいテーマを含んだ1930年以降から日本の成長期までを扱うのです。来年の3月16日の現代展示オープンの準備の今最終段階に入っているわけですけれど、この難しい現代展示を行うのにはいきなりではやはり無理がある。そのためにはプレ展示を一度やって、一般の人たちの反応・反響をまず見てみたいということで行ったのです。それが2006年の「佐倉連隊から見る戦争の時代」の展示でした。歴博で初めて戦争を真正面から取り上げた展示です。これは歴博の現在建っている所が、近世の佐倉城の跡でもあり、その後の佐倉連隊があった所で、これは明治に最初に置かれた連隊ですし、今次の大戦まで兵士を送り続けてきた、そういう戦争の時代の一番の証人になる遺跡でもあるわけです。これは佐倉城、つまり歴博の周辺の景観の中にまだまだその連隊の時の店もいくつか残っておりますし、つまり兵隊と共にいた地域という意味では、この「佐倉連隊のいる時代」というのは地域にとっても非常に身近なテーマでもあります。周辺の人たちが資料の復元に際しては全面的に協力していただいて、そして作り上げたのが佐倉連隊の展示です。特に歩兵第五十七連隊というのは、千葉県下の若者のみが入隊する郷土部隊ですから、そういう面で佐倉市だけでなく千葉県の人たちにとっても非常に身近な展示となったようです。開いたときに驚いたのは、もう朝9時半の開館と同時に来られて展示場に入られ、一日中展示場に居られる方が何人もいらっしゃって、もう何回もご覧になっている方がおられる。そして見ていますと自分の体験をやってきた若い世代の方やあるいは知らない方などに、一生懸命説明をされているのです。それを見た時に、先ほど申し上げた博物館の展示というものはまさに発信だけでなく発信と受信であるということを感じました。展示を通して受信する絶好の機会である。実際、展示を行ったことによって展示中、展示後にたくさんの資料が集められたのです。それが今準備している第6展示室の現代展示に活かされていくということを見ても、受信という機能が非常に大事であると。一方的に我々は発信しているつもりですけれども、やはり受信に対する姿勢というものがこれからの博物館に求められていると、特にこの佐倉連隊の展示のときに学んだということです。

確かにこの戦争の時代ということは、大変難しいテーマではあります。ですから歴博ができた時に、初代館長の井上光貞先生は生活史を中心にした展示を行いたいと強く標榜されたわけです。先生が就任に当たって文化庁長官に2つの条件を出したのは、「今後人事に干渉しない」。もう一つは「展示について現代の観点から歴史を見ること」。当時の歴史学会は政治史が中心であったわけで、そこを越えて考古学の成果を取り入れ、歴史学や考古学で見えない謂わば民俗学の世界、記録されない伝承、民俗世界を盛り込み、歴史的に現代を解明するためには民俗学が必要であろうと、新しい歴史学の世界を構築したいと考えたのです。そうすると展示の中心は生活史となっていくわけです。これは政治を避けるということではなく、生活を通して政治を見るということなのです。兵士を支えたもの、街の有り様などから、戦争を遂行した原動力を考えた

りする。それが佐倉連隊の展示であったわけです。現在も歴博に通じる大通りに菓子店や料理屋などが当時そのままに見ることが出ます。また姥が池の側には、兵士の訓練用の十二階段が残っています。実際にあの上に立ってみると、とても飛び降りられるものではありません。

よく歴博は「都内からの交通の便が悪い」、「不便な場所に在る」と言われますが、都内の中心にない佐倉という地域の良さを最大限に発揮し、館内だけでなく広大な敷地の素晴らしい自然を活かしたいという思いから、私が就任してからすぐマップを作ったという経緯があります。佐倉城という近世の城跡とそれから佐倉の連隊の史跡がたくさん残っている街で、こうした史跡も残っているわけですから、博物館の中で見られない近世の城跡と連隊の跡などの史料、あとはその中にある百年近い植生を、「暮らしの植物園」を含めて楽しんで頂きたいと考えています。都内では味わえないような自然環境あるいは歴史的環境のなかで博物館の中と外を十分に活かしたかたちで楽しんでいただきたい。

以上のように二つの博物館の事例を紹介したわけですけれど、私がもう一つ申し上げたいのが、これは博物館を運営する立場からですが、日頃から博物館に来る人たちに、幅広い人たちに、『歴博の目指すもの』というかたちで、博物館の存在意義とか、博物館の目指すものと同じように、現代社会で人文学がなぜ必要か、なぜ歴史学という学問は必要か明確に説明できるというふうにしたいというのがまず第一です。これは私が最近努めて意識していることなんですが、今の現代社会で人文学がなぜ必要か、あるいはなぜ歴史学という学問は必要か、それからもう一つは博物館は何故必要かということを、事あるごとにいろいろ雑誌等に書いたのは、これからの自分たちの姿勢をはっきりさせ、将来の自分たちの在り方をぶれないで受け継いでもらえると考えたからです。

そしてもう一つは、これまでの閉じられた学会社会では、先ほど最初に申し上げた博物館という文化施設が、現代社会の中で社会使命を全うすることができない。社会の中できちっとした位置付けをするためには研究者という身近な世界、いわば仲間内みたいな世界だけで閉じこもっていてはだめで、より幅広い人たちから博物館に対する意見を自由に発言していただけるような、そういう仕組みを作っておく必要がある。私も今いくつかの県立の博物館の委員等もさせていただいてますけれども、現状を申しますと、とても納得できるような外部の委員会運営ではない。ある県のある委員会では、年１回の外部委員会でこれまでの実績、これからの予定の報告を受け、収集資料の検討、企画展の構想、それらすべてを２時間の会議の中で行う。しかも集められている委員はすべて研究者という人たちです。今いろいろと博物館に批判が及んだときに、職員が現状を力説しても、なかなか一般には受け入れてもらえない。そのときに力を持つのは、外部の人間の評価・意見であるはずなんです。ところが日頃閉じられた館運営をやっていると、ある時、予算削減で資料収集ができなくなった時に、「博物館の使命は学術資料の収集にある」と館員がいくら声を上げてもうまくいかない。こんな時こそ、外部の委員が声を上げて決意表明していただくことで、全然その影響力は違ってくるものです。山梨県立博物館は針の筵のようなところで開館しましたから、最初に「みんなで創る博物館」協議会というものを作らざるを得なかった。設立時の館のコンセプトで作らされた会であったわけです。15名の委員で構成されますが、そのうち仲間内の研究者とよばれる人は２名だけ、あとは学校の現場に居られる現役の先生の方々が２名、ＪＡの団体や観光協会の方、経済のシンクタンクと呼ばれる地元の中心人物、いまや進捗著しい企業経営者のトップの方など幅広いメンバーで構成されています。そして２年ごとにおよそ1/3くらいのメンバーは入れ替わっていきます。すべての事業は「みんなで創る博物館」協議会にかけ、年に４回開催されます。それは厳しいです。地域連携や学校との博学連携というものについては、かなり厳しいものです。また、評価についてはこの場で行われています。これは県の美術館、文学館の評価方式を踏襲しない独自の方法です。館員と県民の代表である委員とで作る評価システムであったわけです。このシステムはミュージアムマネージメント学会でも賞を受けるなど多くの（館の）手本とされています。

これからの評価はネットを通じた評価や（博物館職員が）外部で活動する内容への評価などたくさんの評価を得て、その総合評価をもって真の評価としなければならないと思います。歴博においても、学会だけに情報発信するわけでなく、国内外の広い人たちに見ていただきたいのですから、幅広い分野から人を選択していかなくてはいけないわけで、昨年からは総合評価

の検討委員のメンバーには財界の方やジャーナリスト、外国人などを入れています。研究者は一人だけ。そしてその中心となるのはやはり館員であり、すべての企画の原案は館員が責任を持って提案するべきです。その案について検討、意見をうかがうことで、活発な検討会議となるのです。時折耳に痛いことも言われるわけですが、しかし外ではそのような方が博物館を擁護する発言を必ずして下さいます。日頃は館員に対して厳しいが、いざという時は味方になって下さる。常に開かれたシステムにすることは、館にとって大きなメリットがあることなのです。

最後になりますが、もう一度博物館の使命を確認します。「博物館はその国、その地域社会がもっとも重きをおいている価値観を反映させなければならない重要な施設である。その博物館の調査研究活動に基づいた豊かで多様な自然と歴史に根ざした街や村づくりこそが、国や地域の未来を切り拓く大きな原動力となるに違いない」と信じて、これからも博物館の活動を続けて行ってください。

質疑

佐久間：「博物館が地域に果たす役割」をテーマに午後のシンポジウムでは、博物館と地域の連携・協働を中心にやっていこうと思ってますが、6ページのところで日本の博物館の果たす役割を書いてありますが、これは大きな博物館でも小さな博物館であろうとすべての博物館について共通して持っているべきなのかどうか？

平川：私が申し上げた博物館のいろいろ特色ある機能は、すべての博物館、美術館に共通することです。それから「自然と人間との調和」あるいは「平和の創出」というのは、日本の歴史・文化というものを解明していく、そしてそれを多くの人に理解してもらうという博物館の持っている使命は、博物館の規模とは全く関係ないですから、やはり博物館が現代社会あるいはこれから社会を担って行く人たちに対して常に発信する一番重要な点は、私はやはり「自然との共生」であるし「平和の創出」というふうに、これは共通して大事にしていかなければならないものと考えます。今日の何人かの人の事例報告の資料を見させていただいても全くそれが活かされていると思います。

佐久間：中央博物館のことを話させていただきますが、中央博物館は自然史がメインで活動しておりますが、それに歴史も加えた総合博物館という考え方で活動し、昨年20周年を迎えました。昨年、生物多様性センターも併設され、今後、新たな博物館の役割を模索し館運営を行っていかなければなりません。今日の話は、そういった意味で館のコンセプト、展示の発信と受信のことなど大変参考になりました。「自然と人間の調和」や「平和の創造」の問題など、中村副館長に感想をお願いしたい。

中村：世界平和という大きなことをお話しする気はないんですが、世界平和を実現するには自然と人間の調和しかないんだと、そうしますと、持続可能な社会という言葉がありますが、そういうものはやはり人と自然と文化に求めるしかないんじゃないかと思ってます。それを今日平川先生がずばりと言っていただいたのは非常に心強かった。そのなかで持続可能な社会、地域社会ということなんですが、その原点として我々今、ムラの研究をやっています。最後の言葉の中でムラ作りという言葉を語っていただきましたけど、まさにサステナブルな社会のユニットとしてムラというものを原点にして「里山・里海」というフレーズも含めて、その中の生物多様性というものを軸として、世界に日本のムラのすばらしさを発信できないかということを今いろいろと研究してます。先生の著書の『歴史の原像』のような、そういう思想をぜひ取り入れて勉強させていただきたいと思っています。本当に今日はすばらしい講演を聞かせていただきましてありがとうございました。

一つ質問させていただきますが、われわれ社会教育機関という位置づけで博物館がほとんど位置づけられているんですが、コンセプトの中に「教育」ということを入れられていない、もちろん全部が「教育」だというふうに言われれば、今日の特に企画展示の有り様なんかは、私勉強になったんですが、あえて「社会教育」という観点というものを何故出さないのか、先生のお考えを聞かせていただきたい。

平川：例えば、山梨の県立博物館が「山梨の自然と人の調和」というコンセプトを実践すること、これは現在の子供たちあるいは現代に生きる人たちのこれから何を目指すべきなのか、何を大事にするべきなのかと考えるときに、山梨の自然とどのように向き合ってきたかという思想を明らかにする。そして現代、これからの人の自然に対する自然観・環境観という思想を育てていく、それが「教育」そのものなんですね。で

すから「教育」という言葉をあえて謳ってないんですけれど、私たちは「自然と人間との調和」もそれから「平和の創出」も育てていく、思想を育てる。そういう情報発信をしていくことによって非常に大きな社会を変えていく「教育」になる。「教育」を前面に出さなくてもむしろそういう思想をきちっと確立していくことが、博物館・美術館に足を向けて、実際に公開されたものあるいは活動を通じて学んでいく。まさに学んでいく。そのときに私たちはいつも「教育」という言葉の中に、一方的なひとつのベクトルだけで強制してはいけない。ですから先ほど言いました発信と受信、常に私たちはやったことを受信しているんだと、そして受信していくという中に今度、我々が「教育」されていくわけですね。学んでいくその姿勢がすごく大事なんで、あえてそういう意味では大上段に、私は「教育する」と言わずに、むしろ学ぶことが大事だろうと考えています。

私は博物館にもう30年ぐらい居ます。大学に敢えて出ないというか、やはりその博物館に居ることによっていつも非常に研ぎ澄まされた現代的な、つまり社会が何を我々に、私は歴史学ですから、歴史学で何を解明すべきかということを博物館に居ると、常に身近に感じられるんですね。本来大学は学生がそれをもっともっと教員に要請しなければならない。学生が突き上げるように教員に要求しなければならない。今はそういうこともなく、大学の活性化が叫ばれていますが、博物館はそういうことはない。博物館は展示だけでなく、館内を歩いてますと、ものすごくストレートな質問を受けます。それは私がかつて著書の卜書に書いたことがありますが、千葉県にやってきて最初の講演が墨書土器、文字についてでしたが、ある県民の方より「何故土器に墨書するのか？何故墨で字を書くんですか？」と聞かれたのです。それが墨書土器研究の一番の目的ですよね。それを解明するために私はそれから十年掛かって本に書いたのですが、ある程度解明できたと思います。それが大変プレッシャーとなって研究することができた。学会でそれを質問すると馬鹿にされます。木簡学会で「木に何故墨を塗るのか？」「紙があるのに何故木に書くんですか？」と聞いたら怒られます。しかし、それはまだ解明されてません。解明しなければならない一番大事な問題を見失っている。学会はやはりそういうことに関心がない。厳しく言えばですが、我々が博物館で何かをする時には、曖昧な答えでは許されないんですよ。

そこで来館者といつもキャッチボールできるところに、私は30年間も身を置いてきたわけです。

発表要旨

自然史博物館が地域に果たす役割－植物誌調査を例に－

神奈川県立生命の星・地球博物館企画普及課長　勝　山　輝　男

はじめに

地方の自然史博物館はその地域の自然に関するさまざまな資料を集め、その地域の自然に関する情報センターとしての役割を担っています。したがって、その地域で行われる博物館活動のほとんどが、その地域で何らかの役割をはたしているといえます。地域の自然に関する資料を収集保管し、記録するという自然史博物館本来の活動に、多くの県民が参加し、県内の市民団体や市町村の博物館と連携して行われた事業として、神奈川県植物誌調査の例を紹介したいと思います。

1．植物誌調査

ある地域に生育している植物の種構成をフロラ（植物相）といい、それを記述した書物が植物誌です。神奈川県では1979年から９年をかけて『神奈川県植物誌1988』を作成し、2001年にはそれを改訂する形で『神奈川県植物誌2001』を編纂しました。千葉県でも2003年に『千葉県植物誌』が作成されています。植物誌など自然誌を編纂する作業は自然史研究のもっとも基礎となる仕事といえます。生物多様性の保護が叫ばれ、各地でレッドデータブックが作られていますが、その基礎となる植物相や動物相の把握が十分に行われていなければ、その内容はきわめて不完全なものといえます。

『神奈川県植物誌1988』を作るための調査では、神奈川県に産するすべての維管束植物について分布図を作成することが企画されました。偏りのない分布図を作成するために県内を108メッシュに分け、各メッシュ各種最低１点は証拠標本を作製し、標本に基づく分布図が作成されました。108の調査メッシュを植物の専門家だけでカバーすることはできないので、植物に興味のある多くの市民に参加してもらうことになり、新聞を通じて調査への参加が呼びかけられました。県内のおもだった植物研究者に加えて、教員、主婦、会社員など約150名の参加者が集まり、神奈川県植物誌調査会が発足し、調査や標本の整理、本の作成などにたずさわりました。

1988年に植物誌を刊行し、当初の目的は達成されましたが、その後も、県内の植物相の継続的な記録は必要であり、また、植物誌の改訂も視野に入れ、植物誌調査会の活動は継続されました。調査参加者も約250名に増えました。そして、2001年７月に10余年の調査結果をもとに『神奈川県植物誌2001』（http://nh.kanagawa-museum.jp/kenkyu/plant/florakanagawa2001/index.html）が刊行されました。

2．市民参加の調査とセンターとしての自然史博物館

このような市民参加の調査ではセンターとなる博物館の役割が重要です。『神奈川県植物誌1988』の調査では、横浜・川崎、三浦、湘南、県北、県央、県西の６個の調査ブロックを作り、それぞれ植物にくわしい調査会会員がリーダーになって調査が行われました。横浜・川崎は県立博物館、三浦は横須賀市自然人文博物館、湘南は平塚市博物館がセンターになりましたが、センターとなるべき博物館のないブロックはほとんど機能しませんでした。証拠標本を収蔵する施設として、博物館は不可欠ですが、それだけではありません。必ずしも植物の専門家ではない多数の市民が集まり、植物分類に関する知識を学びながら調査するためには、博物館の機能が大きな役割を果たしました。標本を集積し、整理し、情報を交換する場としての自然史博物館、指導者としての学芸員が必要であることが明らかになりました。

『神奈川県植物誌1988』では約20名の会員が執筆にあたり、一部の分類が困難な分類群は専門家に執筆をお願いしました。『神奈川県植物誌2001』では42名の会員が執筆者となり、すべての分類群を会員で書くことになりました。博物館の学芸員や大学の研究者などの植物の専門家はごく一部で、執筆者の大半はアマチュアで、植物分類学の専門教育を受けたことのないシロウトも多くいました。執筆者となった会員は図鑑からの孫引きではなく、

採集された標本で記載を確認し、ときには原記載や海外の植物誌にもあたりました。過去の記録を調べるために古い文献を探すこともありました。

研究機関に属さないアマチュアがこのような仕事をするには、センターとなる身近な博物館に比較標本と文献がそろっていて、それらが自由に利用できることが不可欠な要素です。幸い、生命の星・地球博物館には約20万点の標本があり、日本産の植物標本はほぼそろっていました。また、図書室には箱根の植物研究で知られた澤田武太郎の文献コレクションが収蔵されていて、原記載を調べるのにはきわめて重宝しました。

3．博物館と市民のネットワーク

『神奈川県植物誌2001』を作成するための調査では、横浜・川崎・三浦・湘南・県央・相模原・それ以外の地域の７ブロックを作り、それぞれ、横浜市こども植物園、川崎市青少年科学館、横須賀市自然人文博物館、平塚市博物館、厚木市郷土博物館、相模原市立博物館、生命の星・地球博物館をブロックの活動拠点として位置づけました。各博物館はそれぞれが各ブロックの活動を自館の事業として位置付け、標本データのデータベース化、標本の収蔵、『神奈川県植物誌2001』刊行後の特別展の実施などを、それぞれの館の独自事業として行いました。また、植物誌調査会の各ブロックの事務局を各博物館に担っていただき、各ブロック代表として調査会の運営委員会に出席し、共同事業の協議や合意は、調査会の運営委員会で行われました。植物誌調査会の運営委員会が調査への参加博物館の緩やかな協議会として機能したといえます。

調査会会員のなかには野外調査だけでなく、標本が集積される博物館での標本整理やコンピュータへの登録に参加した者が多かったのも植物誌調査の成果の１つです。標本整理を体験することにより、標本の大切さがわかり、標本庫の利用の仕方も身につきます。また、博物館のボランティアとして、博物館の標本整理にも活躍してくれました。その結果、未整理のまま積み上げられていた標本の束が使いやすいように整理された博物館もありました。

複数の博物館に出入りして、標本の整理にあたった会員がいたために、ボランティアとして標本整理にあたる調査会会員の間のネットワークは自然にできあがりました。ある博物館で標本整理をしていて発見された情報が口コミで他の館のボランティアにも伝わります。例えば、新しい帰化植物が１つのブロックで見つかると、その情報は他の博物館で標本整理を行っているボランティアにも伝わり、その植物が生えていそうな環境が調査されます。その結果、日本新産の帰化植物が１ヶ所で見つかると、あちこちで第２、第３の産地が見つかることもありました。

少数の専門家だけでは、県内全域の植物分布を監視し続けることはできません。その地域の自然を見守り続けるのはそこの住民です。不用意な開発などによって、ある種の産地が失われたり、存続が危なくなったりしたときにも、そこの住民ならばすぐに情報を得ることができます。引き続き植物分布を監視し続ける地域住民が育ったことも植物誌調査の大きな成果でした。

まとめ

植物誌調査会が発足してから30年がたち、２冊の植物誌を世に出しましたが、植物誌調査に終りはありません。新しい帰化植物の記録、絶滅種の再発見、分布状況の変化など、県内の植物相を記録し続ける活動は今も続いています。また、植物誌調査で集められた標本やデータはレッドデータブックの作成や、丹沢大山総合調査などでも活用され、神奈川県の自然保護や自然再生の基礎データになっています。

植物誌調査を例にあげましたが、動物や菌類など他の生物分野、地学や古生物分野でも博物館を舞台に、ボランティアやさまざまな団体を巻き込んだ調査や研究が行われています。地域の自然に関する資料を収集保管し、記録するという自然史博物館本来の地道な活動そのものが、地域と連携し、地域に貢献する活動になり得るものと確信しています。

発言録

自然史博物館が地域に果たす役割－植物誌調査を例に－

神奈川県立生命の星・地球博物館企画普及課長　勝　山　輝　男

私どもの博物館、生命の星・地球博物館と言いまして、字面で見るとぱっとわかるんですね。一番嫌なのは電話で応対するときに「神奈川県立生命の星・地球博物館です。」と言いますと最後まで聞いてくれない、こちらの方も途中で詰まってしまう。特に、博物館の名前としては真ん中に生命の星でナカグロが入っているのが何か、言葉で喋ったり聞いたりするのにはどうしても耳障りになってしまう。そんなこともあるのですけれど、ただ名前としては欠点はあるのだけれど、博物館としては、やはりこの生命の星・地球というものを一つにはグローバルに捉える、それから（もうひとつは）神奈川県というローカルの立場から見つめて、そして自然と人間のあり方ですか、そういうのを考えていきたい、まあ、そういうコンセプトにたって考えていくと、コンセプトにあった名前をつけているのかなと思います。そんなわけで展示などのテーマも地球、生命、それから神奈川、共生というテーマで活動をしています。

今日は、「博物館が地域に果たす役割」というテーマで話をしにきたのですけれど、実は、皆さんの博物館、美術館等がさまざまな形で地域に根ざして博物館活動をやっているはずなんですね。こういうテーマでどういうことをお話しようかなと考えたとき、私どもの博物館でも、たとえば年に一回、ミューズ・フェスタといって、小田原市の博物館周辺の地元の人たちと一緒に実行委員会を作って、いろんなワークショップというようなこともしてます。それから小田原市周辺の子供たちが夏休みに自由研究をしたり、最近は調べ学習みたいな形でいろんな調べ物をするんですね。そんな中で自然史をテーマにして、子供が作った作品を、じゃどっかに一堂に集めて博物館に展示してあげたらどうか、そういうことを学校の先生たちと連携して試みたりもしています。そのほかにさまざまな形で地域との連携というものをやっています。

私は、実は専門は植物の分類をやっています。その中で特に、スゲ属植物といってイネ科とか先っぽが細くてあまりきれいな花の咲かない、役に立つのはスゲ笠の材料になるんですけれども、そういう植物を専門

にやっているんですね。そういう専門分野をもって博物館に活動している身からすると、たしかに子供さんたち学校の先生たちと連携していろいろなことをやる、地域の自治会と連携していろいろなことをやる、それは意義があるし、それはそれで有意義でいい活動なんですけれど、今度植物分類学の専門家からしてみると、そんなことばっかりやっていると実は標本資料がどんどんたまってちっとも整理が進まない。あるいは少しは論文書けといわれますがちっとも論文が書けない。だんだんだんだんストレスが溜まっていく、ある意味で専門分野を持っている学芸員としてはそういうことばっかりやっているとしんどいという一面があります。（そうした活動は）確かに重要な活動で、博物館をやっていく、地域社会の中で生き残りを図っていくためにも必要ですが、自分を見つめていくとそればかりではしんどいということになっていく。そこでやはり地域に果たす役割というところでも、博物館の一番基幹的な役割、それは先ほど平川先生の話にもあったんですけれども、それは資料を収集して次代に繋いでいく、それから資料に関して調査して利用者に提供していく、それを展示活動あるいは普及活動を通じて人々に伝えていく。それはそれぞれの専門分野の方が、専門的な立場でやっていく、私であれば植物のそういう分布を調べたり、あるいは分類を検討したりというようなところに結びついてくれればそれこそありがたいことはない。そういう意味で私は植物が専門なものですから、そういう自然史博物館が地域に果たす役割というものを、植物調査という一つの部分だけれども語ってみようかなというのが、今日の事例報告です。

実際、自然史博物館に限っていえば、先ほどうちの博物館は生命というものを大上段に振りかざしたテーマをもっておりますが、その中で地域の自然、さまざまな自然を集めて自然のセンターという、そういう役割がすごく重要じゃないかと思うんですね。そのような中で地域に関する自然史資料を集めたりなんかするのに博物館だけではなくて多くの県民が参加して、それから県内の市町村の博物館とも連携して、こういう事業として植物調査をして、しかも植物調査では当然標本を集めますので、そういう標本はさっき申しました博物館の資料収集にもなりますし、さまざまな形で植物の分類の基礎資料になります。市民がたくさんそれに参加してくだされば普及活動にもなります。というところで、自分のストレスがたまらないで地域に貢献していい活動ができるのではないか、そんなようなわけで植物の調査を話したいと思います。

今画面に出ているのは神奈川県の地図なんですけど、千葉県がこちら側で、横浜が中心で、小田原がここにあって箱根火山があるわけなんですが、博物館がこちらの方になります。（神奈川県は）千葉県に比べると小さくてコンパクトにまとまっていて、千葉県に比べると丹沢という山、1500mぐらいの高さの山と箱根火山があって、ちょっと山が高いかなと、ただ県全体の大きさ、それからいわゆる平野部ですけれど、小田原あたりから相模原から川崎にかけて人が多く住んでいるので、千葉県に比べると県の全体像が違うかなと思います。

これは博物館玄関前の様子。もともとは、1967年に県立の総合博物館として横浜で開館した博物館ですが、1995年に小田原市に自然部門だけが独立して県立の自然史博物館というかたちで開館しています。

これが相模湾で、小田原市の中心がこの辺で、早川という川があります。小田原市の中心を流れて、ずっと上流は箱根の方に行ってます。ここに国道１号線があって、小田原市といっても非常に箱根という山裾の近くに博物館があります。皆さんも箱根に行かれるときは博物館の前を通られて行かれるかと思います。

本題に入りたいと思いますけど、植物誌の調査というものは、実は30年以上たっています。1978年頃に始まりました。それ以前も1933年と1956年にも行われています。植物誌というものはある地域にどういう植物が生えているか、一番最初に緑の戸籍簿と書いてありますが、植物がその地域にどんなものが存在するのかというのを書いたものと思っていただけたらいいと思います。それが1978年ごろに、当時の神奈川県立博物館で始まりました。

そのときにどのようなことが始まったかというと、まず第一に出てきたのが、単にどんな植物があるか、これまでにないこういう植物があるとかリストだけ示されているのが各県の植物誌だったんですけれど、県内の分布ぐらいはきちんとわかるようにしようよ、県内の分布の状況を満遍なく県内をメッシュに分けて、そのメッシュの中にあるかないかを調べれば分布状況がよくわかる。それで神奈川県を100個ぐらいに分けて調査をしようよという話が出ました。県立博物館には植物担当の学芸員が２名います。また神奈川には横浜市植物会とかいくつかの同好会がありますが、そういうところにいる人たちだけではとても、到底カバーできないですね。じゃどうしようかというんで、新聞にこういう県内全域を植物調査をやりますと呼びかけをやって、少しでも興味のある人を取り込んで、100近くある調査メッシュを担当していただこうということなんですね。そういう風にやると余り植物に詳しくない人も出てくるわけで、そういった人たちが参加できるように標本の作り方といったものもレクチャーして、植物標本を作ってそれを博物館に収めるとか、そういう形での事業が始まってくるわけです。あと、そういう活動していく中で、これは予測していたわけではないのですが、県内の横須賀市自然人文博物館、あるいは平塚市の博物館、そこの学芸員の方々が、やはりそういうのは一緒にやろうじゃないかということで、結果的に県立博物館と横須賀市自然人文博物館と平塚市博物館を拠点として動き始めました。それと同時に人が集まり、何らかの組織が必要になったので、神奈川県植物誌調査会というものを、任意団体なんですけれども作って調査を始めたわけなんです。

細かいことは抜きにして、はじめ５年の計画だったのですけれど、やはりなかなか組織作りに手間取って、実際には９年かかって1988年頃に厚さ５cmぐらい、重さ４、５キロある大きな本ができました。そこに分布図がありますけれども、県内の植物の分布（3,000種ぐらいになる）を示し、神奈川県内に存在するすべての植物についてわかる刊行物ができたわけです。

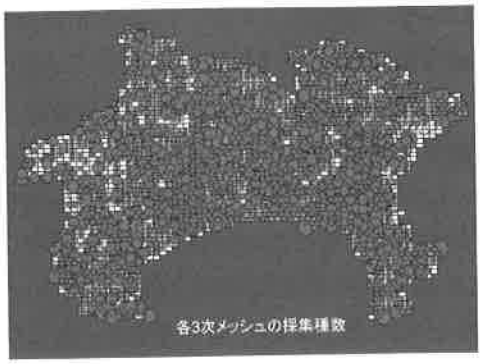
1988年に県内の植物誌ができると、それで終わりなのかなというところなのですけれど、実は県内の地域の植物、どんなものがあるかと記録し続ける活動と

いうものは終わりではないんですね。新しい帰化植物が入り込んできたり、どんなに調査をやっても、神奈川県って狭い県であっても人がいけないところってあるんですね。

そういうところで新しい発見なんかも出てきます。それから自然自体も開発が進めば環境も変わってきますし、あるいは、さっき里山の話が出てましたが、里山が放置されてしまえば状況は変わっていきます。こうした植物を記録し続ける、完璧なものができたからハイ終わりというわけにはいかない、やはり定期的にこれを改定していく必要があるわけです。ということで植物誌調査会もそのまま存続させて、植物誌調査もそのまま続いていくわけです。

さらに2001年に、装丁は似ているんですが、違った形で『神奈川県植物誌2001』というものを出しています。神奈川県を市町村を中心としたメッシュに分け、大きい市町村を分けると、100個になるわけです。分布図の点は国土基本メッシュ・3次メッシュで落としていく。この図は調査をされる方が標本を採って、その標本を取ってきた数を丸が大きいのはたくさんとってきた、丸が小さいのは少ないということで、神奈川県内どのくらい行ったかなということを示す図です。平野はほぼ満遍なく、三浦半島とか、横浜とか県の真ん中の平らなところで人が住んでいるところはたくさん人がいて調査はされてます。丹沢の尾根のハイキングコースのあるところは人が歩かれるんですが、山腹というところは人が歩けない、中にはまったくの空白部が少しはあります。こんな形で神奈川県内の植物を調べたわけです。

そういう結果、分布図でどんなことができるかというと、これ、カンアオイの仲間、5種類並べて点を落としていくと、例えば青いカントウカンアオイはこちらのほうに多いとか、タマノカンアオイはこちらに多い、ランヨウアオイはこちらに分布するとかなんとな



く分布状況がつかめて、小さな県であってもこんな風に違いが出てきます。

あるいは、これはウラジロチチコグサという帰化植物ですけど、最初の1988年に『植物誌』ができたときの分布を緑で示し、そのあと2001年の『植物誌』ができたときに、新たに追加された分布とういものをあげてみました。はじめは、横浜や川崎などで分布していたものが、2001年には、ずっと山のほうまで広く分布していて、(分布を)広げていったことが分布調査からわかります。こういったようなものが植物誌調査からわかってきたものです。

こういう植物誌を作っていく中で、博物館が非常に重要な役割をしています。実は最初の1988年の植物誌を作るときは、呼びかけをはじめた県立博物館、横須賀市自然人文博物館、平塚市博物館が中心になっていたんですけれど、県立博物館は横浜にある。平塚市博物館は平塚にある。横浜、川崎、湘南地域、それから三浦・湘南地域ではそこそこに調査が進んだ。ところが当時まだ、相模原市に博物館はなかった、あるいは丹沢の北の方は博物館がないです。そういうところはちっとも調査が進まない。標本同定会を開いて、それをもとにしてリストを作っていく、調査員の方も新聞で募集したので必ずしも植物に詳しい方とは限らない、そういう人たちの調査能力を向上させるために常に専門家と何かやり取りというものをしていく必要が

ある。そういう中で、あるいは図鑑などで調べるために、それからどうしても図鑑で調べてもわからないときには、標本にしたものと比べてみる。そういうものがあるかないか、それでも全然差がついちゃう。そういうことをしないとそれでぜんぜん違ってきちゃう。横浜周辺のところ、平塚市あとは三浦半島のところは、調査は順調に進んでいったんですが、それ以外のところはなかなか進んでいかない。

そんなことがありましたので、2001年に植物誌を作る活動に入ったときには、神奈川県内は幸いなことには今は相模原市博物館がオープンしましたし、それから厚木市で博物館構想がでて将来的には市立博物館にしようという郷土資料館がもちあがったりしました。そういう関係で活動拠点としましては、3館だけではなく横浜市が植物園なんですけど横浜市こども植物園、川崎市は川崎市青少年科学館、三浦半島は横須賀市自然人文博物館、相模原市博物館、県の中心あたりは厚木市郷土博物館といったところが仲間に加わってくれて、市町村の博物館と、全体の県下を集約するということで生命の星・地球博物館が置かれて活動拠点ができあがってきました。

こうやって植物誌を作っていって、それぞれの博物館はどういう立場でかかわってきたかというと、横須賀市の博物館は自分のところの三浦半島の自然史を調べるという事業としてそれを取り上げる、相模原市の博物館は相模原市の地域の自然を調査するという形で資料を集める。それぞれ資料も収集するし、それに対する調査研究もできるし、それを使って展示もできる。普及活動にも活かせる。自分の館の独自のテーマをもち、生命の星・地球博物館の調査に付き合ってあげているのですよというのでなくて、それぞれがそれぞれの独自事業として取り組んでいただく。それはある意味で全体の緩やかな協議会みたいのものを植物誌調査会の中に持ち、それを神奈川県植物誌調査会という任意団体が担い、県民が参加する受け皿になっていく。というような形の植物調査をやる。また、生命の星・地球博物館では、2001年に植物誌の特別展をやる。平塚市博物館では、ちょっと視点を変えて、平塚バージョンの同じような特別展をやる。相模原市博物館では、やはり相模原市バージョンの植物誌調査に関連した特別展を実施する。横須賀市博物館でも同じような事が行われる。

そんな形で、一つは市町村の博物館を含めて連携して調査が行われた。市民に新聞で呼びかけて最初は120数名で、1988年の植物誌の一番佳境に入ったときに150名くらいの人たちが参加してくださいました。2001年の植物誌を作るときには250名ぐらいに膨れ上がってます。そういう専門じゃない人が調査をやるというのは最初は人手不足なのですが、手伝っていただくうちに専門家との距離が短縮していく。それは開かれた博物館活動という意味で重要で、調査に参加された方っていうのは植物の分類能力が高くなって、それぞれ自分の住んでいるところの植物なら何でもわかる。そういう人が育つということは、地域である植物がだんだん数が減ってきて、これは何か問題があるんじゃないかと、あるいは変な植物が大繁殖していくことに気づいて、帰化植物が繁茂していくことを防げるかもしれない。常に県内の植物の分布状況をモニタリングする人たちが育っていく、ということが大事ではないかなと思っています。

もう一つはこの調査を通じて博物館の中で、神奈川県内の植物については標本が満遍なく、ある意味で広く収集することもできました。それから、神奈川県の植物の分類学的な疑問点も集めることができましたし、参加される方もそれは非常に勉強になる。われわれ専門家も常に地域の自然を見つめていくことになり、しかもこういう活動はあまりストレスはたまらない。自分が専門でかかわっていくその中から標本を作っていくというような機運が高まることができました。そういう意味で地域に根ざした活動として出したんですが、学芸員そのものが一番楽しめるところで、こういう活動を展開していく必要があるんじゃないかなと思うんですね。その辺が大事ではないかなと。そういう意味で自然史博物館、最初と最後のところにも書いておいたんですけれども、それぞれ地域で、植物誌を今回例にあげたんですけども、実は菌類においても同じような事が行われていますし、昆虫に関しても同じように行われています。それから、地学に関しても違う形ですけれども行っています。アマチュアの方々、それから市町村の方々、博物館と連携していろいろな調査が行われていって、市民の方々に還元されていく。ある意味、自然史博物館は地域に根ざした活動をしていれば、それはどんな活動やっていても、いわゆる地域と連携して、それから地域に貢献する活動になっていくんじゃないかなと、私は考えています。

質問

佐久間：斎藤館長さんに聞こうかなと思ったんですが、なぜ生命の星・地球博物館として、生命の星だけにしなかったのか？地球以外にも生命がいっぱいあるという観点で入れられたのかとも思うんですが、博物館のコンセプトにかかわるものなのでお答えねがえればありがたい。

勝山：当時、長洲知事がいらっしゃって、ＮＨＫで『地球大紀行』が放映され、また環境問題が言われていて、宇宙船地球号みたいな形で言われていました。神奈川県は豊かな県だったことがあって、広く地球を背負ってたっていくんだと、知事さんを含めて自負があったんだと思いますね。そういう中で生命の星・、このナカグロは何でつけたのかと言うと、地球は、すなわち生命の星、地球は生命の星なんだよということだと思うんですね。館のテーマの中で最初にあったのは、地球、生命、共生だったんですね。宇宙船地球号というとわかりやすい、そんな中でどうかかわっていけるのか、生きていくのかを問うという投げかけだったと思うんですね。ただ、神奈川県立博物館で活動していた学芸員は、いきなり地球だなんて言われても困るよねということだったんですが、まあこれはグローバルな視点ということが、地球ということで入っているんで、当然そこにはローカルなそれを全部うちの博物館が担おうというわけではなくて、世界各国から岩石とか化石を集めてきますとか、そういう形で世界を上から見るのではなく、地球規模で見るだけでなくて、地元からみていくそういう意味でローカルな視点で見ていく、地球、生命、神奈川、共生をあらわす名称として『生命の星・地球博物館』として、生命の星なんですよ地球はというような、そんなような意味でナカグロをつけたんだと思います。見かけにはぱっと見て頭に入るんだけど、聞くとよくわからないということが名称としてはあります。

発表要旨

地域を支える博物館をめざして

兵庫県立人と自然の博物館（ひとはく）M＆M部門企画調整室長　田　原　直　樹

1　ひとはくにとっての地域の意味―地域に必要とされる存在であること

ひとはくは、大阪都市圏のベッドタウンとして急速に発展した兵庫県三田市のニュータウンに、平成４年に開館した、自然・環境系の公立館である。裏話になるが、誕生に際してモデルとしたのは、千葉県立中央博物館である。準備室当時「千葉並み」という言葉が頻繁に飛び交っていた。しかしながら、千葉県立中央博物館が、沼田館長が四半世紀にわたって築き上げてきた千葉県生物学会の活動の上に成立したのに対して、ひとはくは、ユニークな機能と組織形態を備えていたものの、それを使って何をすべきか、という肝心なことが抜けていた。その意味では、経営危機の到来は当然の帰結であったと言えるだろう。

開館から８年経過した平成12年「新展開」という改革を迫られることになった。以来、誰に対して何をするかを明確化する作業から始まり、それを出発点として、一方で具体的に事業展開を図りつつ、他方で理念的に使命や目標を整えてきた。いわば博物館の再定義であり、現在のひとはくは、このときに始まったと言ってよい。その詳細は別の機会に譲るとして、新展開とは、博物館が地域に必要とされる存在であるためにはどうすればいいかの問い直しであった、と総括することができるだろう。

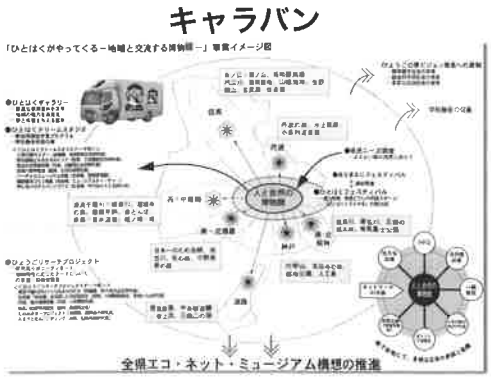
導き出した答えは、納税者である県民に対しては生涯学習の支援、設置者である県に対しては県政課題解決への貢献の２つである。セミナーなど生涯学習支援と、受託事業など自然・環境シンクタンクを両輪とする現在の事業体系は、それを形にしたものであり、さらに敷衍して、地域の人びとが自らの地域の自然・環境を守り、育み、次世代へ継承していく上で欠かせない存在となることを使命として謳っている。以上は、新展開以降の漸進的な歩みを取りまとめたものであるが、ひとはくの成り立ちが地域と切り離せないものであることをご理解いただけるのではないかと思う。

2　地域を意識した取り組み

(1)　地域展開

新展開では、改革の果実を目に見える形で示す必要があった。主力商品と位置づけたのは、セミナー、キャラバン（アウトリーチ）、フェスティバル（イベント）である。なかでも、新機軸として目玉となったのは、ひとはくキャラバンと称するアウトリーチ・プログラムであった。アウトリーチに着目したのは、事業のアピール効果への期待に加え、もうひとつ思惑があった。博物館のパフォーマンスを集客数だけで捉えられるのはたまらない、ということである。立地条件や展示の魅力等の現実を考えると、観覧者数で勝負するのはどう考えても得策ではなかった。評価のための土俵を別につくる必要がある。そこで白羽の矢を立てたのが、「地域展開」、つまり県下各地への博物館活動の展開であった。面積が広く人口が偏在しているという地理的特徴をもつ兵庫県では、各種行政サービスが偏りがちになる現実がある。県立館として県下全域を視野に入れるべきという大義名分を逆手に取って、サービスの地域的広がりでアピールすることを考えたのである。地域展開のシンボルとなったのがキャラバンであった。

最初の年である平成14年度は県下10カ所でキャラバンを実施（一カ所当りの開催期間は２週間で合計20週余）し、参加者数は２万人であった。15年度は８万人、16年度は13万人と次第に増え、近年は15万人を超えている（ただし、平成20年度は、キャラバン事業の大幅見直しに伴い10万人程度となっている）。現在、中期目標の数値指標のひとつであるビジター数（総利用者数）の半分以上は館外事業によるものであり、その過半をキャラバンが占めている。地域展開はレゾンデートルであると同時に、ライフラインなのである。



キャラバン以前にアウトリーチ活動がなかったわけではない。既に

開館時から移動展や館外講座などのメニュがあったが、淡々とこなしているだけという感じであった。それに対して、「ひとはくがやってくる」をスローガンに、博物館事業をまるごと地域に持っていくことを標榜するキャラバンは、コンセプトこそ違っていたが、事業内容にそれほど差があるわけではなかった。最も違っていたのは、連携相手の獲得と、それによる地域との絆づくりという明確な意図をもっていたことである。地域展開が地域との絆づくりになるためには、顔の見える関係に裏打ちされていなければならない。でなければどのような事業も一過性のイベントに終わってしまう。

こうした意図から、キャラバンは、地元の住民やグループ、各種団体、施設、自治体などの「参画と協働」（兵庫県政の基本方針でもあった）によって進めることとし、地域に実行委員会をつくって、地域の実情に合わせてテーマや事業内容を決め、地域の自然・環境についての参画型調査（リサーチ・プロジェクト）を実施し、その結果を生かして展示（ギャラリー）、講座・イベント（セミナー）を開催するのを基本形とした。現在は、地域づくり支援など館外活動が多様化する中で、キャラバンのあり方も変わり、必ずしも実行委員会形式をとらなくなったが、事業が地域との絆づくりにどのような効果があったのかについては、連携施設数などの指標を用いて把握するよう努めてきた。

(2) パートナーシップ

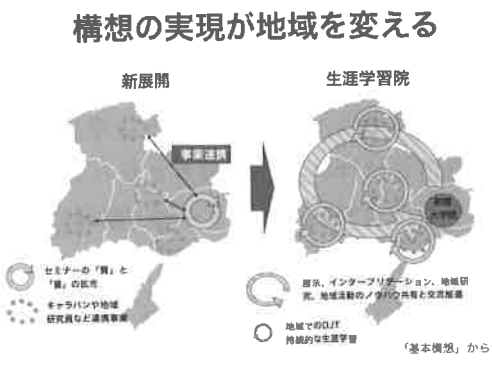
一方、地域の側から地域展開を見ると、地域にどのような意味をもつかが問われることになる。こうした観点からの意義の問い直しを通じて、地域研究員養成事業が生まれた。これは、地域展開を通じて地域の自然・環境・文化の次世代への継承を担う人材養成を目的とする事業であり、同時に「パートナーシップ」という館の運営方針に沿ったものであった。パートナーシップを運営方針にした理由は、一義的には、使命の達成は館員だけの力では不可能であり広範な担い手がいて初めて可能になるということであるが、顧客の囲い込み戦略の一環という側面もあった。

新展開を招来するに至った館の危機に際して痛感したのは、「私のひとはくをつぶさないで！」と言ってくれる人の存在が最終的に館の存続を左右する、ということである。サポーターとでも言うべき熱心なファンを増やすには、顔の見える関係づくりが欠かせない。関係性マーケティングにおける顧客の階梯の上位に位置づけたのが連携・協働の相手であるパートナーである。それには、ボランティア養成事業の過程で、ボランティアグループ「人と自然の会」がNPO法人格を取得し、館とパートナーシップを組みつつ連携・協働事業を実施してきた実績を通じて、その可能性に目覚めたことが大きい。こちらの都合のいいことをやってくれる便利屋ではなく、対等な関係でなければならない。パートナーという表現には、こうした思いが込められている。

パートナーシップのための仕組みとしては、個人を対象とする「地域研究員」、グループを対象とする「連携活動グループ」がある。以上はいずれも認証制度であるが、協定締結によるものとして、施設を対象とする「連携施設」と、自治体を対象とする「連携協定」がある。パートナーシップは締結より維持の方が難しい面があるため、地域研究員や連携活動グループが集まる機会を設けている。ひとはくフェスティバル（毎年文化の日前後に開催）と、共生の広場（毎年２月11日に開催）である。特に後者は、活動を発表する場と位置づけており、平成20年度は、およそ300人が参加し、19件の口頭発表と27件のポスター・作品展示があった。

3　今後の展開方針―生涯学習院構想

ひとはくでは、新展開への取り組みが一段落した平成16年度からネクスト・ミュージアム・プロジェクトと称する将来像の検討を進めてきた。その成果をもとに、平成17年度から19年度にかけて「新たな人と自然の博物館基本構想・計画」を策定し、すべての人の生涯学習を支援することを目的とする仕組みである生涯学習院を目標像として掲げた。ここで言う生涯学習とは、「胎教から墓場まで（岩槻邦男）」の人の生涯にわたる学習を一体的にとらえたもので、社会教育だけでなく学校教育や家庭教育を包含する概念である。本構想・計画をひとことで言えば、県下各地に自律的な生涯学習の場と機会を創出することをめざして、そのために必要とされる仕組みのあり方と、その実現に向けてひとはくがどのように関与すべきかを示したものである。地域を支える博物館。その実現は、ひとえに地域での担い手の養成にかかっている。



発言録

地域を支える博物館を目指して

兵庫県立人と自然の博物館M＆M部門企画調整室長　田　原　直　樹

ただいまご紹介に預かりました「人と自然の博物館」の田原でございます。

私どもの博物館は、兵庫県ですので、関西エリアにあります。関西にあると、なにかこう関東方面に来るとちょっと構えてしまうのでありまして。関東の人が関西に行っても構えないんですよね。でも、なぜか関西の人間は、勝手に頼まれもしないのに、なんとなくこう…。特に大阪の人間は、東京に対抗意識を燃やしたりして。まぁ、東京は全然相手にしていないのですけれど、そういうところがあります。で、私の目から見ましても、関東の博物館の生き方と関西の博物館とでは少し違うような気がしています。今日はそういう話題ではないんですが。

私は、マーケッティング・マネージメント部門という非常に恥ずかしいような名前の部署におりまして。これが、先ほど申しました関西系のノリなんですね。平気でこういう名前をつけてしまうという…。企画調整室というところにおります。うちでは学芸員ではなく、「研究員」といっていますが、私は研究員でございます。

簡単に私どもの博物館をご紹介させていただきます。

平成４年に開館いたしました。従いまして、17年目になります。まだ未だに直営でありまして、近隣市では、例えば神戸市の博物館など、どんどん指定管理者制度を導入しているところでありますが、うちはまだ今のところ直営であります。

「人と自然の博物館」というちょっと個性的な名前かと思います。自然系の博物館ではありますが、ちょっと変わったところがあります。そもそも、私のような都市計画が専門の人間がですね、自然系の博物館の学芸員をしているということ自体が普通でないような。私も最初はそう思っていたのですが、今では当たり前になっています。（うちの館は）ちょっと環境色が強いと思います。今は、先進的な博物館が環境色が強いというのは、取り立てて特徴ということにはできないかと思いますが、17年前はまださほどなかったかな、というように思います。もちろん、この千葉県立中央博物館さんは、その当時からそういう形でありました。

正規職員数が、48名ぐらいおりますが、そのうち36名が研究員ですので、研究員の率が大変高いという特徴があるかと思います。

その辺が機能面の特徴といえるかと思いますが、研究重視という掛け声でできた博物館でありまして、県立大学と重ね合わせをしているという特異な組織になっています。学芸員ではなく、研究員と呼んでいるのも、そういうところから来ているものであります。兵庫県に置かれております４つの博物館に、研究職が置かれているのはうちの博物館だけ、ということになります。兵庫県立の博物館のなかでも、特殊なんですね。

機能面では、教育機能、つまりセミナーを熱心にやっている。教育機能を前面に出して、あまり展示に重きを置いていない、というと語弊があるのですが、要は展示に自信がないものですから、それ以外のところで勝負していこう、というところがあります。

活動の特徴は、今日の話につながりますが、とにかくアウトリーチを熱心にやってきたのではないかと思っています。それから、イベント好き。本当は、好きではないのですけれども、イベントをよくやらざるを得ない。そのためには、連携をしていかないと、人材が確保できないのですね。実際には、アルバイトの方もいるのですけれども、そういう方を含めましても100名には満たないわけでして、いろんなことをいっぱいやっていこうと思うと、いろんな連携が必要になってくる。連携をモットーにしております。

位置は、土地勘が皆さんないかと思いますが、大阪のベットタウンではあるんですけれども、やや遠い感じがありまして、郊外のニュータウンにあります。

ビジター数、このビジター数というのは、わけのわからない数字でして、話せば長くなるのですが、総利用者数とでもいうんでしょうか。私どものサービスの受け手の数、総数です。全部で50万人ぐらい。というと、すごく入っているような気がしますが、いわゆる観覧者数といいますと、20万人にはなりません。残りは、アウトリーチで稼いでいるということになります。年間予算は5億円。恵まれているのではないかと思います。

今日の話は、地域がテーマですので、最初に私どもの博物館が地域との関係を見直すことになった経緯をご説明したいと思います。

先ほど司会の方から少しご紹介があったかと思いますが、私どもの「新展開」という改革に触れざるを得ませんので、そこから出発させていただきます。

今日は、博物館協会の方々にお話するということですので、どちらかというと、公式でないお話をさせていただいた方がいいのではないかと思っておりますので、何でも包み隠さず、まぁどうしても言えないこともあるのですが、まあ、何でもお話するつもりでいますので、のちほど遠慮なくご質問いただければと思います。

実は、レジメの方には書いてありますが、平成4年に開館して、私は準備室時代からおりますけれども、準備室のころは、「千葉並み」という言葉が飛びかっておりまして、実はこの千葉中央博さんがモデルになっていました。我々が何か話すときには、すぐ「千葉はどうなのか?」、「千葉並みだ」と言われていた。そのわりには、千葉の方は、職員数も60名ぐらいということで、それよりも小さい。行政というのは、なかなかしみったれていまして、「千葉並み」といいながらも、それを超えることは絶対にしない。そういう典型なんですけれども。やっぱり、当時は千葉の中央博さんを皮切りに、大きな自然史博物館がたくさんいっぱいできている時代だった。1990年代ですね。そのころに、その一つとしてできた博物館。そうして、淡々と気持ちよく日々を過ごしてきたわけなんですけれども、そのうち「新展開」という改革をやるに至るようになったのは、平成12年ごろ。晴天の霹靂なんですね。では、なんでそのような改革をやらなくてはいけないようになったのか、といいますと、当時年間予算が10億円なのに入館者が10万しか入っていない。「30名も研究員がいるのに、一体彼らは何をしているのか?」と言われるようになるんですね。「研究室にこもって、ひっそりとしている」とか、ですね。

「最初、つくるとき、できる前には、どんどん研究機能を重視するといってつくったんだから、環境問題とか、県政のいろいろな課題や何かにどんどん提案が出てきてもいいじゃないか」と、いわれる。

「館長の言うことも聞かずに、勝手なことをしている」特にこれは、大学の一部と重ねあわせの構造でできていることに対する批判ですね。結局、大学の方では、別の指揮系統がありますのでね。

で、最後、「こんなつもりじゃなかった」これ、誰が言ったかというと、だいたいお分かりじゃないかな、と思うのですが、普通こうなると、かなりやばいですね。で、我々も、「これは…」と思ったんですね。それで、ここから、改革をやることになりました。

もう一つありました。天の声、兵庫県の知事の設置者としての意見というのは、大変声が大きくて、非常に影響力が大きいものですから、こう言われたのは本当にショックだった、ということです。

そこで、「兵庫県立人と自然の博物館の新展開」という報告書を出して、これはまぁ改革の検討の一つの成果として出しておりますが、改革をやりました。その中身は、こういうことです。

さきほどの、外圧が契機となっておりまして、本当の内発的なものでは必ずしもないですけれども、しかし始まってからは「とにかく自分たちでやれ」と命令されまして、「その改革の是非を見て、今後の扱いを決める」と、そんなふうなニュアンスだったわけです。

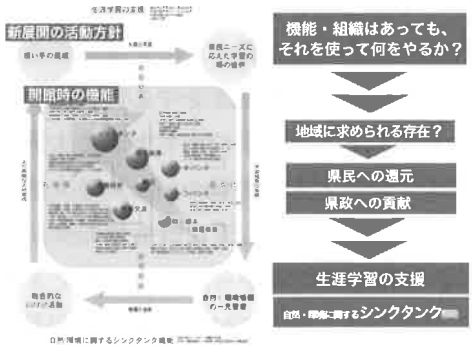
結局、なぜこういう事態が起こったのか、ということを考えざるを得ませんでした。

特徴ある機能というのは、例えば通常の博物館的な機能に加えて、絶滅危惧にある遺伝資源、主に植物ですが、保護・増殖ですとか、いろいろな自然環境情報をストックしていくセンター機能ですとか、県政課題・行政課題に対して提言できるようなシンクタンク機能ですとか、そういうものです。

加えて研究機能を大変重視した研究型博物館。こういうことなのですけれど、ユニークな機能と組織形態ができてきたのですけれども、結局それを使って何をすべきか、という肝心なところが抜けていた、というところなのだと思います。このあたりが、先ほどお話がありました神奈川県博さん、例えば植物なら植物をずっと県民といっしょに追いかけていくとかですね、

あるいは千葉の中央博物館さんをはじめ、皆さんが博物館を作るための基礎固めをしてきた、そういうが芯がなかったことが、博物館の新展開を招いたのだろうと思っています。必然的なことだったのかもしれないと今は思うようになりました。要するに、ミッションが欠落していたということですね。

博物館の新展開は、平たく言えば、「誰に対して、何をするか」という活動方針が全然定まっていなかったものですから、そこをまずきちっと明確にして、共有化したということですね。いわゆる理念とか、そういうものを議論するというのは、開館のときにすべきことなのですけれども、我々は走りながらやろう、というか、せざるを得ませんでした。そのなかで、今納税者で、館のユーザーである、潜在的なユーザーである県民の皆さんに対して何ができるか、ということですね。もう一つが、設置者には設置者の思いがあるわけですから、その通りにだけやればいいというわけではないですが、県政課題の解決に何か貢献するべきだ、県に対して何をするか。というところの２本を立てました。



一方は、展示。本当は魅力的な展示を作りたいと思ったのですが、展示は、できてしまっている博物館ですから、今更もう作り直せない。自信がなかったものですから、じゃあ自分たちでできるものでやろうじゃないかと思って目をつけたのは、学習機能。学習機能を重視というポリシーは、このとき考えたものです。それだけじゃなくて、アウトリーチを熱心にやってみようと。そういう話なんですね。一方、シンクタンク機能については、私のような分野の地域づくりを支援するような、そういう専門の人もいますので、自然分野の人と一緒に地域の自然や環境に対していろんな関わりをして、発信していこうと考えたわけですね。こういうことを考えながら、活動方針を決めて、それに向かって実際にやっていこうとして、やり始めていくと、その事業をやるためにどういう組織が一番いいか、ということになり、組織のあり方までも少しずつ模索しながらやってみるようになり、マネージメントの仕組みもでき、「中期目標」なんかもできてきた。それが、新展開だったのかな、と思っています。

今の話をすると、非常にたいそうなものにみえますが、知事の発言に対して、素直にただ答えただけ、ということです。あんまり何も考えてないです。考える余裕もなかったものですから、反射的に、というのが楽屋裏だったということは、博物館関係者のみなさんにはばらしておきます。

「新展開」について話すのが今日の本題ではありませんので、これぐらいにしておこうかなと思いますが、今日の地域ということでいえば、私どもの地域展開は、もうひとつ新しい博物館を作ったようなものだ、ただし箱も人も同じだった、ということがあります。すでに８年間もストックがありましたので、まったく新しく始めたわけではないのですけれども、意味合いとしては何か再定義したということかなと思います。そのときに、自分たちが放りこまれている地域に必要とされるには何が一番重要なのかということから、考えざるを得なかったというところなのですね。それが、私どもの博物館の地域との関わりだと思います。

で、岩槻現館長、当時は館長ではなかったのですが、「外から見ていて、別の館になったと感じた」と言っておられましたので、私どもだけでなく博物館の再定義、というふうに見ている人が多かったのではないかと思います。

このときに、舌をかみそうなこの名前は、もうやめよう、ということになりまして。一般の県民の方は、なかなか「人と自然の博物館」とは言ってくれないですね。それで、「ひとはく」というようにしようということになりました。まぁただ、今でも皆さん「ひとはく」とも言ってはくれないのですが。この中身（については）、先ほど言ったこととの繰り返しになりますが、まあ、こういうことです。

二つ目の話が、地域とどういうふうにかかわるかということを考えざるを得なかったのですが、そのなかでも特にアウトリーチが、私どもの博物館の地域との関わりでの特徴を現しているのではないかと思いますので、それを説明させていただきます。アウトリーチというと何なんで、「地域展開」という言い方をしています。私どもの博物館は大変カタカナが好きなので

すが、一般の方からは「わけわからん」といわれますので、「地域展開」と言っています。改革の成果をすぐ示さなければならないということがあったもんですから、そのときにいろんな主力商品といいますか、何に重点を置いて力を注ぐかということになるのですが、そのときに地域展開をやると決めるに至った経緯というのは、主にこういう理由です。

入館者数です。皆さんのところはどうでしょうか?「何人入ったか」ということばかり聞かれるんですね。いい加減にしてほしい、と思ったんですが、しかし、それ以外に館のパフォーマンスを表す指標をこちらでつくっていかないと、もう非常に一方的な評価しかされない、と思いましたんで、そのために別の土俵としていいのが、「地域展開」じゃないかと思ったんですね。実は、兵庫県は、非常に広い県域をもっていまして、奈良県の2倍ぐらいあります。しかも、瀬戸内から日本海までということで日本の縮図といわれて、南北問題なんかもあります。つまり、神戸とか兵庫県の中心は南の方、瀬戸内側にあります。で、北の方の日本海側の人達というのは、ものすごく行政サービスが受けにくいという思いがいつもあるんですね。そういうところに、きちっとサービスをやるということは、やはり県にとっては非常に必要な要素ですので、そういう生き方をしてみようか、とちょっとそういう部分がありました。そういうことで、アウトリーチがあります。

この絵は、新たに予算要求をしたときの絵。このときの予算要求の目玉は、こういうトラックが一台欲しいということです。ちょうど、このころ郷ひろみが渋谷ライブとかいうのをやっていまして、あれを見て、うちの館員がひとり「ええな～」と言ったんです。「うちもあれやろう」と。その車でいろいろな村にまわって、郷ひろみの渋谷ライブやろう、というんですね。で、予算担当の人にははじめは無常にも、「トヨタに行け」とか言われたのですが、ともかくこの趣旨だけは理解してもらって、300万ほどの予算をつけてもらったんですね。当時、兵庫県は、10の行政区域にわかれていたものですから、各行政区域一箇所ずつ行く、ということになりました（発表要旨図参照）。

写真を3枚ほど見ていただきますと、雰囲気がわかっていただけると思います。会場を借りて、展示もします。キャラバン用に、子どもたちを集めるための小道具なども用意しました。

実は、キャラバンを始める前も「移動展」をやって

いた。しかし、このころはひっそりやっていただけでした。それで、このころとどう違うのか、ということなんですけれども、まず連携相手ですね。キャラバンというのは地方に行くわけですけれども、そのときに、その地域にある博物館、博物館類似施設、あるいは公民館とか、そういう施設、あるいは外にいるアマチュアグループとか、あるいは地方の行政となんかも、連携してやっていく。連携相手を獲得して、それを通じて地域と絆をつくるという明確な意思・意図があったところが一番の違いかなと思います。このときの絆というのは、お互いに顔が見える関係にならなくては一過性になってしまうということで、これを常々感じていましたので、その解決策として、まずは地域に実行委員会を設置する。移動展示をやるのに、いちいち実行委員会をつくるのは、自分たちとしても非常に邪魔くさいのですけれども、地域のいろんな人達と実行委員会をつくって、そこで、「この地域のテーマは何にするか」、というところから話し合うんですね。実行委員長は地元の方にやっていただくことが多かったです。これをやるために相当エネルギーがかかるんですけれども、たとえば川なら川の水温調査を小学生と一緒にやってみよう、とか、そういう簡単なものから参加型調査をやりまして、その結果どうなったかということを博物館の標本なんかと一緒にですね、参加型の調査の結果も展示する。そのときに、一緒に参加したアマチュアグループの方なんかに、講師として参加していただいて、顔の見える関係づくりをしつつ講座を組む、というようなそういうことをやりました。こういうことをやりながら、地域との関係づくりをどれだけできるか。こういう連携を、連携施設がいくつできたか、というような指標で進めてきたということです。

最初の年は県内10ケ所で一ケ所2週間はやりますので、トータル20週間。この20週間が多いか、少ないか。最初は移動だけですごくくたびれた。さきほど

の予算の300万円のほとんどは、輸送費だったわけですね。かなり輸送費がかかった。で、2万人ぐらいの人が来ました。人数としては、非常にわずかなんですけれども、3年間の事業としてやりましたので、やり方をいろいろ工夫しながらやってくると、だんだん人数も増えてきて、これ以降20万人ぐらいのところまでこぎつけてきた、というのがつい最近です。

ただ、今はこのキャラバンのあり方を大幅に見直しています。あとで時間があれば付け加えたいと思いますが、こういう形でやってきました。

先ほど当館のビジター数を紹介しましたが、ビジター数の過半数が館外活動です。それが、キャラバンということです。我々にとっては、数字を生み出すための、ライフラインだということを本音としてお話しておきます。

もう一つ地域の話として、パートナーシップということがあります。すでに、アウトリーチの話で、地域との絆づくりをお話しましたけれども、パートナーシップをポリシーにする必要があるということを新展開のときに痛切に感じまして、それ以来、ポリシーにしたところです。

キャラバンは、ビジター数を稼ぐとか、県に評価してもらうとか、そういった動機があったことは正直に申し上げたとおりですが、実際にやってみますと、それが地域にとってどういう意味をもつのかということを当たり前のことながら考えざるを得なくなってきました。そこで地元の方々、本当の意味でパートナーを組めるような方々をこういう事業を通じて、パートナーとして養成していく。まぁ養成というとおこがましい限りなのですが、そういう方を発見していくという事業が必要であって、それによって地域のなかの自然や環境にかかわっていく人間が増えていく。我々と一緒に事業をやっていくことで、我々の活動も広がりますし、地域にとってもいろいろな意味をもってくる。そういうふうな意味づけ、方向付けをしなければいけないんだということに気がつきました。すでに申し上げましたとおり、パートナーシップが非常に重要だと思っていたものですから、このキャラバン事業をきっかけに「連携」ということを意識し始めたので、その連携について少しお話しようと思います。

なぜパートナーシップを新展開のときに痛切に感じたかといいますと、やっぱり「私のひとはくをつぶさないで」という人がどれぐらいいるかということが、最後には決め手になるのではないか、ということです。そういう人をつくれていない、ということ自体、館の危機であると思いました。そこで、どうして関係をつくっていくかという、関係性マーケティングという手法があるのを、研究会でマーケティングの専門家から教わりまして、「これだ」と思ったわけですね。

関係性マーケティングとは、一見さんで館に来た方からリピーターがでて、そのうちそのなかからすごいファンが生まれ、頼まれもしないのに「ひとはくってすごいよ」と言って、ピーアールしてくれる方が生まれる。その関係性のレベルと、パートナーづくりが一致するという話なんです。

その一つとして、「NPO法人人と自然の会」というのがありまして、そことのお付き合いが非常に重要だということの説明の図ですけれども、これは館があんまりコントロールできていませんので、省略させていただきます。

ここは、今日の話に絡んで重要だと思いますので、実際パートナーシップの形として紹介します。「地域研究員」といいまして、個人を対象にして私どもと一緒にいろんな活動をやりたいという方を認証する。認証というと言葉がすぎますけれども、登録に近いもの。

それと、「連携活動グループ」というのがあります。グループを対象にして、やはり認証するかたちになります。実は、この連携活動グループではなくても、いろんなグループと事業を通じて連携しています。事業

地域研究員養成

連携を通じて、もう一度連携という関係性を作り直しちゃおうというものなんですね。

で、施設については、これは始めたばかりなんですが、連携施設を協定でつくるようになります。皆さんのお手元にさきほど配布させていただきました「佐用町の昆虫館」ですが、この前の台風9号（2009年8月）で被災しました。この一連の動きも私どもの博物館が協力してやっていますが、実は私どもの連携相手になったばかりだったんです。調印式があった昼間は晴れていたんですが、ちょうどその夜に豪雨があって、被災してしまった。そういうドラマチックなシチュエーションがありましたので、こうした協力をしています。

施設連携は、自治体とやっています。キャラバンのときにたまたま接点ができて協定を結ぶのはいいのですけれども、遠方にいる地域研究員とは日常的には接しないという問題がある。そういう場合、やっぱりパートナーが館にやってくるという日をつくっておかないと、絆を持続できないんですね。で、会う回数が重要ですから、最低一年に2回ぐらいはやってきてもらう。その1つがフェスティバルです。

あと「共生のひろば」という一種の活動発表会をつくっておりまして、どんな会なのかといいますと、こういう活動の発表をする場です。子どもたちも一緒ですので、館長賞とか、名誉館長賞とかを出すとすごく喜んでもらえるんですね。しょうもない賞品なんですけれども。口頭発表だけでなく、展示もやる。ポスターといっていますけれども。ポスターではなくて、作品だけでもいい、というものです。

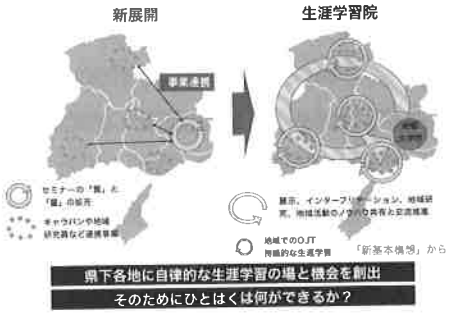
最後に、今後の展開方針について、ごく簡単にご説明します。新展開が一段落したときに、このまま同じことを繰り返していたのではまたやばいことになる可能性がありますので、常に将来計画をやらなくてはいけない、と身にしみました。そこで、35歳以下の職員で「ネクストミュージアムプロジェクト」ということをやりました。ちょっとカタカナが過ぎますね、恥ずかしいですが。これは、民主党の「ネクストキャビネット」の真似でして、35歳以下の職員がいずれ中堅になったときに「こんな博物館をつくりたい」というようなものをまず非公式に描いてみようというものです。それをベースに基本構想・計画を、これは公式な手続きでつくっています。

「生涯学習院」これは岩槻館長が常々言っている「胎教から墓場まで」から来ています。前は、「受精卵から墓場まで」と言っていたんですが、最近「胎教」になったのは、「受精卵ではもう遅い。お母さんが重要だ」ということなのですが、生涯学習院というと学習院大学を思わせていい表現とはいえないと思うんですけれども、まあ館長が言った言葉というのはなかなか消せませんで、このことばが計画の中に入っています。要するに、生涯に渡る学びを考えたときに、「ひとはくは何ができるのか」ということをもう一回きちんとさせようという話でありまして、それが目下のところのテーマです。

そうなったときの地域展開の話ですが、こちらがアウトリーチでかけていくのではなくて、地域研究員で意図しているように地域の方々だけで、かなり自立的な活動が行われていく。地域の自然環境を次世代に継承していく、というのがうちのミッションなんですが、それを地域の方々がやっていく。地域の方々だけではやりきれませんので、私どもの博物館がそれを支援していく。そういう関係をもっとつくりたい。最終的に県下各地に自立的な生涯学習の場と機会をつくる。それが、今後の究極の目標。非常に遠いんですけれども、今これを目標にいろんな事業を考えているところです。

ということで、ちょっと時間がオーバーしてしまったようですけれども、これで終わらせていただきます。

ご清聴、どうもありがとうございました。

共生の広場

地域貢献のイメージ